



TITLE:

サゴヤシを保有することの意味：セラム島高地のサゴ食民のモノグラフ

AUTHOR(S):

笹岡, 正俊

CITATION:

笹岡, 正俊. サゴヤシを保有することの意味：セラム島高地のサゴ食民のモノグラフ. 東南アジア研究 2006, 44(2): 105-144

ISSUE DATE:

2006-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/53847>

RIGHT:

サゴヤシを保有することの意味
——セラム島高地のサゴ食民のモノグラフ——

笹岡正俊*

**The Meaning of “Sago Palm Ownership”: A Monograph on the Sago Eater
in a Highland Community in Seram, Eastern Indonesia**

SASAOKA Masatoshi *

The purpose of this paper is to consider the social meaning of “ownership” of sago palm (*Metroxylon* spp.) in Seram, eastern Indonesia.

In the highland community under study, local people depend heavily on sago starch as a staple food. Every sago clump belongs to a certain holder of sago palm (*ipia kua*). Although the number of sago palm clumps held by each household varies, there is no significant difference in the frequency of sago intake among households. This is because people who have harvestable, mature sago palms transfer the right to utilize sago palm to people who do not.

Sago palm is not regarded as a resource that can be utilized exclusively by an “owner.” *Ipia kua* are expected to give usufruct rights in sago palm to the needy without compensation. At the same time, *ipia kua* maintain the sago groves in good condition in order to secure effective utilization by the community. Taking this point into consideration, *ipia kua* should be regarded as “custodians” or “managers” of sago palm rather than right holders with total ownership to sago palm.

Keywords: sago palm, *Metroxylon* spp., Seram island, ownership, holding, un-exclusive utilization

キーワード：サゴヤシ，セラム島，高地村，保有権，非排他的利用

* (財) 林業経済研究所, Forest Economic Research Institute 2-7-26-201, Tabata, Kita-ku, Tokyo, 114-0014, Japan
e-mail: masatoshi-sasaoka@nifty.com

I はじめに

ヤシ科の熱帯木本植物のうち12属が樹幹の髓部に澱粉を貯蔵するヤシとして知られている。そのうち、南北緯10度の東南アジア島嶼部やメラネシアの低湿地に分布するサゴヤシ (*Metroxylon* 属のヤシ) は澱粉生産力が特に高く [山本 1998: 3], バナナやタロイモやパンノキなどと共に、古くから食料資源として利用されてきた [高村 1994: 830-832]。

「陸稲化現象」 [佐々木 1989: 47-83] によってサゴの重要性が低下している地域もあるが、インドネシア東部島嶼部やニューギニア島低湿地では、イモ類やバナナと並んで、サゴヤシからとれる澱粉 (以下「サゴ」) が今日に至るまで人々の暮らしを支える上で重要な役割を果たしてきた。¹⁾

筆者がこれまで調査を続けてきたインドネシア東部セラム島の高地でも、サゴは重要な主食となっている。この地域は、サゴヤシの生育不適地と言ってよく、自生するサゴヤシは存在しない。サゴヤシは、みな植えられたものか、かつて植えられた母樹から発生したものであり、すべての株に特定の保有者が存在している。また、セラム島高地はサゴの生産性が極めて低い地域であるにもかかわらず、人々はイモやバナナよりもサゴに高い価値を見出しており、サゴが他の主食食物を抜いて摂食頻度の面から見ても、エネルギー量の面から見ても、格段に重要な主食となっている。

本研究が対象にするのは、このように、サゴヤシが高い価値を付与された希少資源となっていて、その全てに明確な保有関係が成立しているような地域における、サゴヤシの保有権である。研究の背景について述べる前に、ここで「保有権」という用語について説明しておこう。「所有権」は、一般に「特定の物を排他的に支配し、使用・収益および処分機能を有する権利」といった意味で用いられることがある。しかし、後に見るように、セラム島高地ではそのような排他的な権利は存在しない。サゴヤシは非保有者から求められれば与えなくてはならない財であり、それに対する権利は、何者にも妨げられない排他的な権利ではない。したがって、本稿ではそれを、近代法にみる独占的、排他的な「所有権」概念と区別し、他者からの制約を受ける相対的な権利であるという意味を込めて「保有権」と呼ぶことにする。²⁾

1) 高谷は作物の組み合わせの型と耕地の種類 (水田, 常畑, 短期休閑畑, 焼畑) から、東南アジアを①「水稻卓越区」, ②「イモ区」, ③「サゴ区」, ④「イモ・稲区」, ⑤「温帯作物区」, ⑥「陸稲・雑穀焼畑区」, ⑦「陸稲焼畑区」, ⑧「雑穀短期休閑畑区」, ⑨「水田・常畑区」の9つの耕作区に区分している。高谷は、サゴヤシ澱粉への依存が1割以上の地域を「サゴ区」としている。「サゴ区」とされているのは、ボルネオ東部から東に広がり、スラウェシの大部分を含み、マルク諸島に至る地域である [高谷 1985: 22-34]。

2) 「保有権」という用語をあてたのは、独占的・排他的支配権の典型であるローマ法型の「土地所有権」に対して、「規制」や「計画」に拘束されたゲルマン法型の土地支配が、「土地保有権」と呼ばれてきたことをふまえている [篠塚 1974: 6-8]。なお、田中 [1994: 371] は、非近代社会の様々な

これまで保有権（「所有権」）に対しては、環境社会学や生態人類学から多くの関心が寄せられてきた。それは、資源管理や自然保護を考える上で、保有権が重要な概念のひとつだからである。例えば、地域の人々の意向に沿った資源・自然の保全策について考えようと思えば、地域の環境と人とのかかわり、および地域の環境をめぐる人と人との関係を理解することが必要となる。保有権は、まさに、それらのかかわりや関係が社会的な制度として形を現したものである [宮内 1998: 125]。サゴヤシに強く依存する社会を対象に、サゴヤシの保有権について調べることは、その社会が環境とどうかかわり、環境をめぐるどのような社会関係が構築されているかを理解することに役立つ。また、それは地域の資源管理や自然保護を考える上でも有益であろう。

サゴヤシ保有（所有）について言及のある主な先行研究には、ニューギニア島のイワム人とセビヤール人、そしてハルマヘラ島のガレラ人3民族のサゴヤシ所有を比較した吉田 [1993]、ニューギニア島のクボ人やベダム二人を対象に、土地所有の有無とサゴ生産量の関係やその歴史的变化について論じたDwyer and Minnegal [1995; 1997; 1999] の一連の研究、定住後のクボ人がサゴ採取労働組織を柔軟に編成することで土地所有の不均衡に対処したことを明らかにしたSuda [1990]、スラウェシ島のルウ人を対象に、サゴ生産工場建設によるサゴ生産社会の変容を扱った遅沢 [1990]、そして、ニューギニア島のギデラ人のサゴヤシを中心とする多様な資源利用戦略を扱った大塚 [1994] などがある。

これらの先行研究は、サゴヤシを保有することの意味について検討することを主眼に置いていない。むしろ、Dwyer and Minnegal [1995; 1997; 1999] やSuda [1990] の研究では、サゴヤシが非所有者に対してアクセシブルな資源であることが示されるなど、サゴ食民にとってのサゴヤシに対する権利の性格を示唆する内容となっている。しかし、保有と相続に関する取り決め、利用慣行、そして、それを支える観念や信仰体系などを踏まえつつ、ホーリスティックな視点で保有の内実に向った実証的研究は、管見の限りまだないのである。

以上を踏まえて、本稿では、セラム島の一高地村であるマヌセラ村を事例にとり、人々の暮らしを根幹から支えるサゴヤシをめぐる社会制度（保有と相続に関する取り決め、非排他的利用慣行、非排他的利用を支える観念、利用規制）を子細に記述した上で、サゴヤシを保有することの社会的意味について考察することを課題とする。

本稿の結論を先取りして言うと、セラム島高地においてサゴヤシを保有する（保有権を持つ）ということは、①サゴヤシ（利用権）を持たざるものに提供すると同時に、②サゴヤシを良

↘ 「所有」の有り方を念頭に置いて（そこでは“所有主”と“財”の関わりは排他的であるとは限らず、“所有主”は使用・収益・処分に関して権利を主張できるとは限らない）、所有権を「個人または集団が有形無形の〈財〉に対して持つ優先的権利」と定義しているが、ここで言う「保有権」も、さしあたってそのような権利概念を意図している。

好な状態に保つ役割を担う，ということの意味している。実はこれと類似した指摘は，すでに大塚 [1994: 66] が行っている。しかし，大塚は①についてはともかく，②については具体的な根拠を示しておらず，実証的な議論をしていない。

なお，これまで行われたサゴヤシ利用に関する社会科学研究の多くは，ニューギニア島の低地で行われたものである。セラム島におけるサゴヤシ利用に関する報告は，沿岸民のサゴヤシ利用技術について論じた Ellen [2004] を除いて，ほとんど存在しない。したがって，セラム島高地のサゴヤシ利用の実態をできるだけ多角的な視点から子細に描くことは，それなりの意味がある。そのため，本稿ではモノグラフの記述をこころがけている。いずれセラム島高地では，ニューギニア島のサゴ食民が経験してきたような社会変容 [Suda 1993] に直面する可能性があるが，本稿でモノグラフ的な記述を心がけたのは，そのような変容過程を扱う将来の研究に資することも射程に入れている。

本稿の構成は以下の通りである。まず続く II で調査地と調査方法について述べた後，III では，人々がどの程度サゴに依存しているのかを具体的に示す。そして，従来の研究が強調してきた栽培学的優位性の観点からだけではなく，人々の食物への嗜好性（主観的評価）を踏まえてサゴ依存の背景を明らかにする。IV では，サゴヤシ利用をめぐる社会制度を様々な視点から記述したうえで，サゴヤシ保有者であることの意味を，サゴヤシ利用権の分与とサゴヤシ林の保全の2つの観点から検討する。最後に，V でまとめを行い，今後の課題を提示する。

II 調査地と調査方法

セラム (Seram) 島は，東西の幅約340km，面積約1.86万km²で（ほぼ四国と同じ広さ），マルク諸島のなかでは最大の島である。セラム島には2003年時点で約36.5万人が暮らしており，人口は沿岸域に集中している [BPS Kabupaten Maluku Tengah 2003]。沿岸部にはムスリムの村，クリスチャンの村，両宗教集団の混成村が点在している。内陸部に暮らす人々はクリスチャンかアニミストである。

中央セラムの南海岸沿岸部は地元民の小規模なチョウジ (*Syzygium aromaticum*)，ナツメグ (*Myristica fragrans*)，カカオ (*Theobroma cacao*) などの植えられた農園が広がる。しかし，海岸線から内陸に2-3km入るとマヌセラ (Manusela) 山脈山麓の急峻な斜面が迫っており，人為的攪乱をあまり受けていない熱帯雨林が豊富に残されている。一方，北海岸沿岸部のワハイ (Wahai) 周辺には海岸線沿いにココヤシ林が広がり，シアテレ (Siatele) にはカカオのプランテーションが，パサハリ (Pasahari) にはエビ養殖場がある。また，パサハリ以東の低地には，熱帯林を切り開いて造成されたジャワ人の移住村が点在している。以上に加えて，1980

年代初頭からワハイ周辺で始まった商業伐採が徐々に操業地域を拡大してきたこともあり、北海岸では一次林・老齢二次林が内陸部に深く後退している。

セラム島、ブル（Buru）島、ハルマヘラ（Halmahera）島の内陸部に古くから住んでいたとされる人々はアリフル（Arihuru）と呼ばれる。セラム島のアリフル人は、すべてオーストロネシア語族に属するが、少なくとも19の言語グループに分類できる [Valeli 2000: 16–19]。

調査を行ったマヌセラ村は、行政的には中央マルク県北セラム郡（Kabupaten Maluku Tengah, Kecamatan Seram Utara）に属する。2003年時点で村の人口は約320人（約60世帯）である（図1）。村はコビポト（Kobipoto）山（1,577m）とビナヤ（Binaya）山（3,027m）の間に延びる、マヌセラ峡谷に点在する高地村³⁾のひとつで、標高約730mのところにある。北

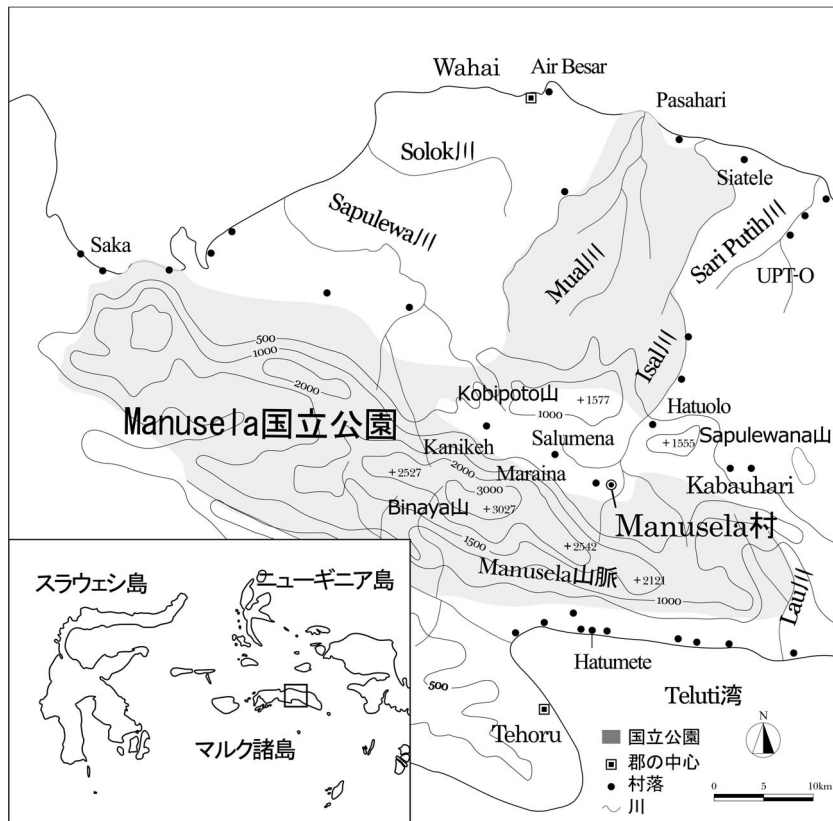


図1 調査地（セラム島中部）

- 3) 内陸部の山岳地域は、気候が冷涼であることから、低地と比較して①シカやイノシシなどの大型の狩猟資源が乏しい、②サゴヤシの生育が遅い、③有機物の分解が遅く土壌層が厚いために移動耕作の際に火入れを行わないこともある、などの特徴を持つ。このような特徴を共有している標高約500m以上の内陸奥地に位置する、マヌセラ村、マライナ（Maraina）村、サルメナ（Salumena）村、カニケ（Kanikeh）村などを、本稿では「高地村」と呼ぶ。

海岸からは直線距離で約40km, 南海岸からは直線距離で約15kmの内陸部に位置し, 北セラム郡ではもっとも僻地に位置する。

かつてこの地域一帯に暮らす人々は, 出自集団を同じくする複数の世帯が, 森の中に点在する高床式大家屋に共住していた。しかし, 1890年ごろオランダ植民地行政の指導の下, それまで森の中に分散して暮らしていた人々を集めて, 現在のマヌセラ村の母体となる集落を作った。それ以前は, この地域の人々は点在する小集落を移動させたり, 小集落間を人々が行き交ったりする離合集散的な生活を送っていたと思われる。

村人は塩, 灯油, 洗濯石鹼, 調味料, 衣類などを購入するために, 商店のある沿岸部の村に行く。車の通れる道路は村へは通じておらず, 北海岸側へは徒歩で1泊2日もしくは2泊3日, 南海岸へは丸1日あるいは1泊2日ほどかかる。90年代半ばに北海岸のサリプティ (Sari Putih) 川の中流に移住村 (UPT-O) が造られ, その後, その周辺地域で鉄木を中心とする木材伐採が始まった。それに伴って, 未舗装だがバイクや自動車の通行可能な道が造られたため, 北海岸沿岸部の村へのアクセスは改善されつつある。

マヌセラ村の生業は, サゴ採取, バナナ・タロイモ・キャッサバ・サツマイモなどを主作物とする根栽農耕, クスクス (*Spilococcus maculatus*, *Phalanger orientalis*), シカ (*Cervus timorensis*), イノシシ (*Sus celebensis*) の狩猟, ロタン, ハチミツ, 各種樹木野菜, シダ植物の若芽をはじめとする多種多様な森林産物などの採取である。水稻・陸稲栽培は全く行われていない。

村人の主要な収入源は, チョウジがつぼみをつける9月初旬から11月初旬の間に, 南海岸のテルティ (Teluti) 湾沿岸の村に出稼ぎに行き, 季節農業労働者としてチョウジの摘み取りを行うことで得られる現金である。チョウジは毎年開花・結実するとは限らないため, 不作年は, オオバタン (*Cacatua moluccensis*) やズグロインコ (*Lorius domicella*) などのオウムやインコを捕獲して販売する村人もいる。また, 沿岸部に出稼ぎに出て, そこに暮らす親族などからサゴヤシの利用権を得てサゴ採取を行う者もある。彼らは採取したサゴ澱粉を保有者と分けた後 (通常は所有者と収穫を二分する), 自分の持分を販売して現金を得ている。このようにして得たわずかな現金は, 沿岸部の商店で生活必需品を購入するのに不可欠のものである。

セラム島の中央部には, 1982年に設置されたマヌセラ国立公園 (面積189,000ha, 島の面積の約10%を占める) がある。国立公園のエンクレープ (飛び地) には, 4つの高地村があり, 約900人が暮らしている。⁴⁾

本稿で扱うデータは, 2003年2月から2005年9月にかけて断続的に行った延べ約11カ月間の調査で収集したものである。フィールド滞在中, 本稿に関連する調査としては, サゴ採取の

4) 北セラム郡役場の統計資料 (2003年) による。

観察（サゴ採取の労働組織、サゴ採取者—採取したサゴヤシの保有者関係などの聞き取り、採取されたサゴの計量）、サゴヤシ保有規模の聞き取り、主食用食物摂取量調査、食事調査などを実施した。聞き取り調査は全て筆者がインドネシア語を用いて行った。

III 主食としてのサゴ利用

III-1 サゴヤシの生育特性と澱粉抽出技術

サゴヤシは種子または吸枝（サッカー）により繁殖する。吸枝発生もしくは移植当時は、幹を形成しておらず、地面近くで葉が展開したロゼット状態にある。このロゼット期を経過する間に新葉を旺盛に発生して根元の部分が肥大化し、それが最大になって幹を形成する〔下田・パワー 1992: 244〕。

サゴヤシは幹立ちするとその髓部に澱粉を蓄積してゆく。環境条件によって大きく変わるが、一般に硬質土壌では吸枝発生から8年から12年、泥炭土壌では12年から15年を経過すると樹幹頂部に花芽を形成する。この花芽（花梗）は幾枝にも分岐した後、花をつける。花芽形成から開花までは約2年かかる。なお、開花前（開花の約2-3年前）の幹に最も多くの澱粉が含まれると考えられている。サゴヤシは1年生であり、開花後に種子をつけた個体はやがて枯死するが、サゴヤシはその基部に多数の吸枝を発生させるため、生育ステージの異なる多くの吸枝や幹立ちした個体からなる株を形成する。したがって、伐採や枯死により成熟した個体がなくなっても、サゴヤシの株は存在し続ける〔山本 1998: 18-19, 35〕。

マヌセラ村を含む高地ではサゴヤシの自生が困難であるため、この辺りにあるサゴヤシ林は全て人の手によって造られたものである。人の手で造成されたといっても、比較的土壌水分の多い生育適地の植生を刈り払って吸枝を移植した後は、サゴヤシ林を拡大するので無い限り、次から次へと吸枝が発生してくるので、新たに植栽する必要はあまり無い。

新たに移植したばかりの幼少の個体は、草本や蔓に覆われると、出葉した子葉の展開がそこなわれるなどして、成長が著しく遅れてしまうため、一定程度の大きさ（waieni の大きさ）になるまでは比較的集約的な保育を必要とする。⁵⁾しかし、すでに株を形成しているサゴヤシについては、サゴ澱粉採取を行うときに、下刈り（pameli）や蔓の切断（totoolea）、そして最も成長の良い吸枝を残して残りを伐採する間引き（aipelei）を行う程度である。このように、サゴヤシは植物の全生活史に占める人間の役割が限定された、野生と栽培の中間に位置する半

5) 乾季に行くと、土が乾燥して幼少個体は枯れてしまうことがあるので、雨季に下刈りを行う。雨季の間、3カ月に1度ぐらいの割合で下刈りや蔓の切断を行う。

栽培植物 [松井 1989: 45] であるといつてよい。

サゴヤシから澱粉を抽出する方法は、地域により様々である [Nishimura and Laufer 2002: 7-15]。セラム島のサゴ澱粉採取技術については、中央セラムの南海岸沿岸部に暮らすナウル (Nuaulu) を調査したEllen [2004: 601-625] の報告がある。セラム島高地におけるサゴ澱粉採取の方法も、ナウルのそれと基本的に同じであるが、ここでサゴヤシ伐採から澱粉の抽出までの過程を、伐採対象の選定、整地と伐採、丸太の切り出しと分割、髓の粉碎、サゴ洗い、抽出した澱粉の貯蔵、に分けて概説しておこう。

まず伐採対象となる個体を選定する。表1に示すように、村人はサゴヤシの生育段階を11段

表1 村人によるサゴヤシの生育段階区分

①Anania	生えてきたばかりの吸枝で未だ幹を形成していない。葉は3-4枚。葉は水平方向に展開していない、樹高1-1.5mの若い個体。
②Waieni	幹を形成し始めた個体で膝ぐらいの高さのところで葉が分かれてロゼット状に展開している若い個体。
③Sapei tupe	幹を形成しているが、まだ背丈が低く、伐採して澱粉採取を行うことができない個体。
④Upepoto (Ukulola)	樹高が sapei tupe よりずっと高くなっているが、開花までにまだ時間がかかり、今後も成長が見込める個体。澱粉採取が可能だが、幹の先端の部分は湿っていて澱粉含有量は少ない（髓が乾燥しているほど澱粉含有量は高くなる）。
⑤Rapulili	頭頂部に近い葉ほど葉柄が短くなってきている株。サゴヤシは開花・結実前に、樹冠頂部に layalo と呼ばれる花芽を伸ばす。樹幹付近に小さな葉（sanahata kesu）をつけはじめた株は、まもなく layalo を伸ばす。
⑥Wanausu	Ropu-ropu layalo（花芽・花軸）を伸ばし始めた株。layalo は長く直立しており、淡い緑色をしている。まだ枝（花梗）を出していない。 layalo が多くの分岐した枝（花梗）を伸ばしている株。layalo はまだ緑色をしている。 layalo がさらに多くの小枝（imalaka）を枝珊瑚のように分岐させた個体。ラヤロは赤色を帯びてくる。 layalo が赤褐色になり、片鱗をつけた扁球形の実（Ipia Aka）をつけた状態。
⑦Itawasana	
⑧Ataleke	
⑨Imalaka musunu	
⑩Atamoto	
⑪Motoa	実を落下させ（aka puku）、頭頂部の layalo を落下させ、徐々に枯れて行く過程にある状態。 枯死した個体。

出所：聞き取り調査より作成。

注：Ropu-ropu (wanausu, itawasana, ataleke) の状態にある株の澱粉含有量が最も多い。

階に分類している。幹立ちした個体は、徐々に伸張し、幹に澱粉を蓄積してゆく。樹冠付近に小さな葉（sanahata kesu）をつけはじめた株は、まもなく樹冠の頂上に layalo と呼ばれる直立した花芽を伸ばす（wanausu と呼ばれる段階）。その後、layalo は第一次、第二次、第三次の花梗を分岐させ、開花・結実して個体としての一生を終える。その過程において、花梗を「シカの角」のように分岐させる。この時、layalo はまだ緑色をしている（itawasana 段階）。その後、枝珊瑚状にさらに小さな花梗を分岐させ、layalo は褐色を呈するようになる（atakleke）。その後、片鱗をつけた扁球形の実をつける（imalaka musunu）。このように、花芽を出して開花・結実するまでの段階は ropu-ropu と総称されており、imalaka musunu の手前の段階にある個体が最も多くの澱粉を含んでいると考えられている。マヌセラ村の住民によると、セラム島高地では気候が冷涼なため、サゴヤシの生育には時間がかかる。収穫適期にある個体の樹齢は15年から20年であるという。伐採対象木の選定には、生育段階の他にも、集落や出作り小屋からの距離やサゴ洗いに必要な十分な水がそこで確保できるかどうかなども勘案されている。

伐採対象木が決まったら、その周囲の下刈りを行う。この時、同じサゴヤシ林内にある別の株の周囲の下刈りや幹にまわりついたツル植物の切断などを行うこともある。長期にわたって保育を全く行わなければ、叢が覆ってサゴヤシが枯死し、サゴヤシ林は次第に森に戻ってゆくこともある。そのため、サゴ採取を行う際、ついでに伐採対象木以外の株の保育を合わせて行うのである。

下刈りやツル植物の除去が終わったら、斧でサゴヤシを伐採する。その後、幹に着生した植物や、枯れた葉鞘などを山刀で取り払ってきれいにする。大きな葉鞘と小さな葉鞘をそれぞれ2つ用意してサゴ洗い用の桶（haru）を小川のほとりなどに設置する。

伐採された幹は、適当な長さ（1.5–2.5m）に区分され、山刀で切込みを入れる。幹の側面に木の杭を打ち込み、区分された幹のひとつ分（otoni）を縦に2つに割る。このようにして割られた幹の片半分は、faani と呼ばれる。これにまたがって座り、金梃子のような形をした wetikai と呼ばれる道具か、小さな鍬のような形をした tomoha と呼ばれる道具で髓を削り落とす。柔らかな髓は、「シャリッ、シャリッ」と、小気味よい音を立ててリズムよく粉碎される。普通、1日（実際に作業をするのは約半日）の作業で、faani 1つ分、もしくは2つ分の髓が削り取られる。

取り出した髓は、米袋か背負い籠に詰めてサゴ洗い場に運搬される。サゴヤシの髓は、葉鞘で造った樋に入れられ、水を加えて両手でよく揉まれる。出てきた白濁色の液体は布で濾されて下の船形の桶に溜まる。それをしばらく放置しておく、澱粉（ipia use）が沈殿してくる。抽出された澱粉は、サゴヤシの小葉で作られた樽型の ana か、葉鞘で作られたラッパ型の pohai と呼ばれる俵に詰めて貯蔵する（写真1）。

通常、anaはサゴ洗い場の横に置かれる。村人は数日分のサゴを、竹ヘラでanaから取り出し、集落に持ち帰る。持ち帰ったサゴはプラスチック製の桶に入れ、水を少し加えて台所に保管する。それが無くなったら、ふたたびanaに向い、サゴを集落に持ち帰る。そのたびに、anaに水を少量かけて乾燥を防ぐ。このようにすると、約3カ月はサゴの質を保つことができる。それより長期間保存するためには、pohaiに詰めて小川の中に沈めておく(alolo)。水の中で保存するとサゴは白みが増し、味もよくなる(粘り気が増して香りがよくなる)という(写真2)。anaに保存されたサゴは時にはネズミに食べられることがあるが、水の中に沈められたサゴはそのような被害を受けることも無く、1年近く保存できるという。しかし、1年経つ頃になると、酸味を帯びてきて食味が落ちてくる。樹幹に近い部分から抽出された澱粉はすぐに酸味を持ってしまうため、pohaiに詰めるサゴはサゴヤシの根元に近い部分からとれたものを用いる。

筆者が直接観察することのできた43のサゴ採取事例(2003年7月初旬から8月中旬にかけて15世帯が行った計43本のサゴヤシからの澱粉採取の事例)における労働組織の内訳を見ると、「1組の夫婦」が27事例で最も多く、そのすべてにおいて、男性が髓を掻き出し、女性がサゴ洗いを行っていた。残りは「1組の夫婦と

そのどちらかと親族関係を持った男性1人」という組み合わせが6事例、「親族関係を持つ夫婦2組」が5事例、そしてその他(親族関係を持った男性2人など)が5事例で(表2)、いずれも何らかの親族関係を持った2世帯の組み合わせであった。いずれの共同採取事例においても、共同採取者は収穫後にサゴを等分するのではなく、幹を縦に割った段階で、faaniを分けていた。



写真1 沈殿したサゴ



写真2 サゴを水中で保存する

表2 サゴ採取活動の労働組織

1組の夫婦	27
夫婦+親族関係を持つ男性1人	6
親族関係を持つ夫婦2組	5
親族関係のある男性2人	2
男性1人	2
夫婦+息子	1

出所：フィールド調査より作成。

注：2003年7月から8月にかけて観察できたサゴ採取活動43事例(15世帯の43本のサゴヤシからの採取事例)の労働組織。

III-2 サゴヤシの多目的利用

髓部から抽出された澱粉を食糧として利用する以外に、サゴヤシは実に様々な用途に利用されている（図2）。サゴヤシの食物としての利用について述べる前に、ここではサゴヤシ副産物の利用について述べておきたい。

葉柄／葉軸（topa）は壁材や天井材に、小葉（wate oku）は屋根の材料になる。集落にある61軒の家屋のうち、1軒を除く全家屋の壁が、サゴヤシの葉柄を並べて作られたものである。全戸の屋根はサゴヤシの葉で葺かれている。

サゴヤシの葉柄の断面はずんぐりした三日月形をしている。そのため、葉柄下部の窪みをナイフで削って形を整え、何本もの葉柄を縦に同じ向きに並べてゆくと、隙間のない壁ができる。葉柄でできた壁は大変長持ちする。1970年に現在の場所に集落を移動させたとき、古い集落から壁材を運びそれで家を建てた人がいる。その壁材は調査時点でもまだ使われていた。葉柄は水に濡れなければ、少なくとも30年以上は長持ちするのだという。

一方、サゴヤシの葉で葺いた屋根は、虫が食うなどして葉が痛み、雨漏りをするようになる。かまどからの煙を常に浴びている台所の屋根は比較的長持ちするというが、それ以外の部分は特に傷みが早い。そのため、村人は3-5年に一度ぐらいの間隔で屋根を葺き替えている。屋根は長さ1.2-2mの竹の棒に小葉を縫いつけた長方形の屋根材（wate apaisa）で葺いてある。平均して1軒当たり約200-500枚の屋根材が用いられているが、これは約100-200本分の葉（複葉）に相当している。多様なサゴヤシ利用のなかでも頻繁に必要とされる屋根材の利用は特に重要であるといえる（写真3）。

サゴヤシの葉柄を利用する場合、枯れた葉が採取されるが、屋根を葺くのに小葉を採取する場合は、upepotoの段階にある個体から生きた葉が採取される。この場合、村人はサゴヤシを傷めないように1本の幹から、根元に近い葉を1-2枚ぐらいの割合で採取するにとどめる。後に述べるように、マヌセラ村では全てのサゴヤシに保有者がいるが、保有者に断りを入れなくても小葉や葉柄の採取を自由に行うことができる。

小葉や葉柄以外にも、サゴヤシの葉鞘がタバコやビンロウジを入れる小物入れ（lopa-lopa）や、水を汲むための桶などに加工されている。その他にも、サゴ洗いで出てきた髓の残滓はカオの苗床に利用されているし、髓の残滓から発生したキノコも食用になる。⁶⁾ また、サ



写真3 村の民家

6) サゴ洗いをしっかりと行わず、廃棄した粉碎された髓の残滓にまだ澱粉が残されている場合に、多くのキノコが生えてくる。発生してくるキノコの多寡でサゴ洗いをまじめにやったかどうかを推し量れるという。

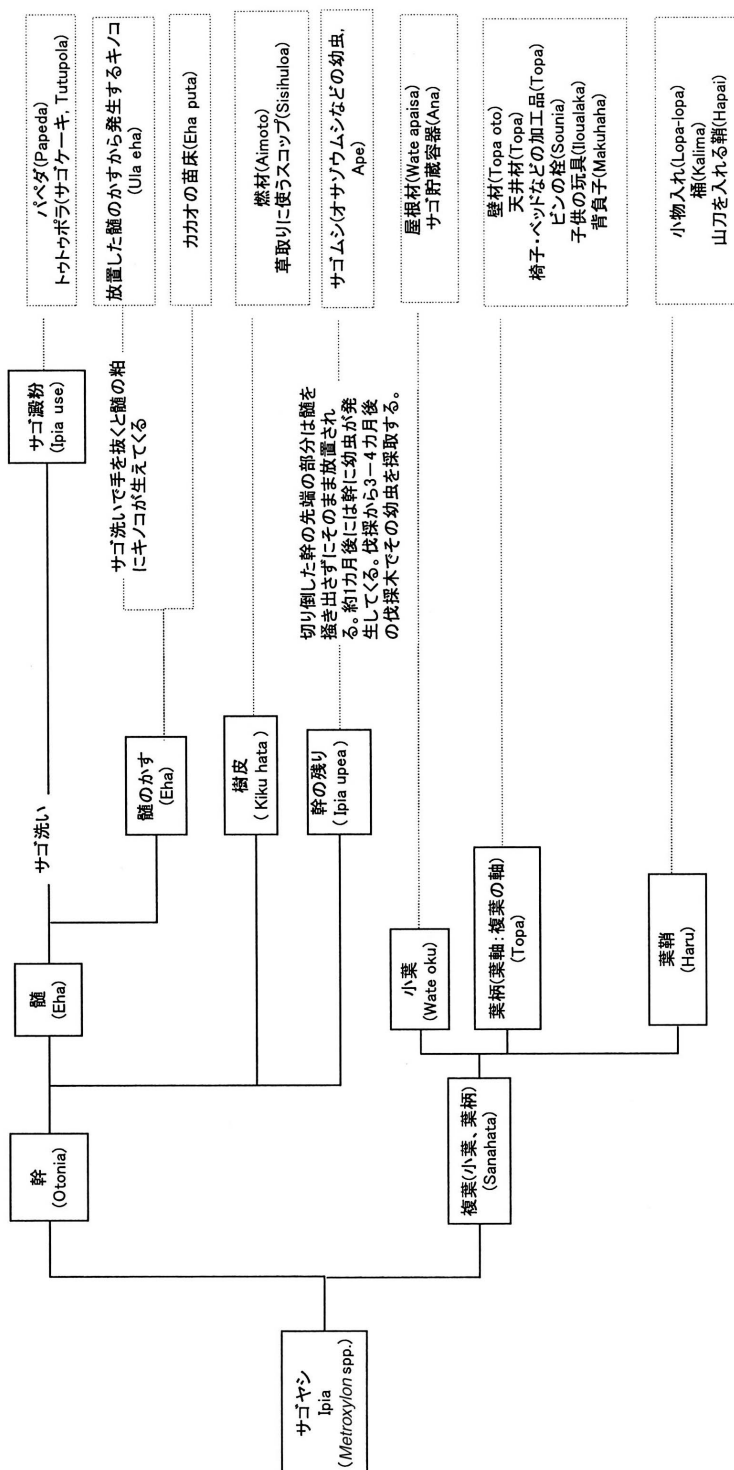


図2 多目的利用されるサゴヤシ

ゴヤシの樹皮 (kiku hata) は燃材として利用される。さらに、伐採されたサゴヤシの幹の残りは、サゴムシ (ゾウムシの幼虫, *Rhynchophorus ferrugineus*?) の採取に利用される。髄を削り取った後、サゴヤシの幹 (otonia) はそのまま放置されるが、そこに約1カ月後、ゾウムシの幼虫が発生してくる。伐採から3-4カ月後には幼虫が5cmぐらいの大きさに成長してくるので、山刀で幹を切り開き、ほじくりだして採取する。サゴヤシの保有者や利用者 (サゴヤシを伐採し澱粉採取を行った者) 以外でも自由に採取できる。幼虫は採取現場で生食されることもあるがスープなどにして食べる。サゴムシは食生活への量的貢献という点ではあまり重要ではないが,⁷⁾ 脂肪を多く含む「旨い食べ物」とみなされており、食物資源としての村人の評価は低くない。

かつてサゴヤシには、棘の無いホンサゴ (*M. sagus*) と、葉鞘や葉柄に棘を持つドゲサゴ (*M. rumphii*) に分けられていた。しかし、両者の交雑が可能であること、また交雑の結果得られた種子の実生に棘のあるものと無いものが現れることから、両者を同一種とみなす見方が有力になってきている [山本 1996: 50]。いずれにしても、サゴヤシを利用している地域では、棘の有無や長さ、樹高、棘の発生部位などによってサゴヤシをいくつかの品種に区別している。マヌセラ村の住民も、サゴヤシを7つの品種に弁別しており、各品種の特徴に応じて、人々はサゴヤシを多目的に利活用している (表3)。

III-3 食生活におけるサゴ澱粉の重要性

サゴを用いた代表的な料理は生サゴ (加工されていない生のサゴで「濡れサゴ」とも言う) に熱湯を加えて葛湯状にしたものである。生サゴに水を加えて牛乳のような状態した後、熱湯を加えながらかき混ぜると次第に透明になり、澱粉が凝固して葛湯のような状態になる。これが papeda と呼ばれるセラム島高地民の主食である。クスクス、シカ、イノシシなどの肉、もしくは干し魚のスープと共に食べる (写真4)。



写真4 papeda

7) 動物性食物のうち最も摂食頻度が高いのはクスクスであり、それに続いて、干し魚 (海辺の村で購入され、村に持ち込まれたもの)、シカ、イノシシとなっている。摂食頻度からみる動物性食物の相対的な重要度を示すものとして摂食割合 (食事の回数に占める各々の食物の出現回数の割合) を見てみると、クスクス28.9%、干し魚14.1%、シカ10.9%、川エビ10.5%、イノシシ7.0%となっていた (以上、上位5位までの食物が全体の約4分の3を占める)。食事内容を記録した計3,805回の食事のなかで、動物性食物が献立に現れた回数は1,784回であった。サゴムシの摂食割合は2.2%にすぎなかった。

表3 サゴヤシの品種

No.	ローカル名	インドネシア名	形態的特徴	利用方法	壁・天井 材としての 葉柄の利用	屋根材 としての 小葉の利用	サゴ ケーキ 原料	長期 水中保存 (ado) の適性	吸枝 生存率	植栽頻度
1	Lapauno	Sago Molat	最も高く成長する品種。葉柄には刺がない。澱粉は赤みを帯びている。	tutupola (サゴケーキ) の原料にはこの品種のサゴ澱粉が好まれる(赤味を帯びた澱粉で作られたトウトウボラは美味であると考えられる)。Lapaunoの葉柄は、やわらかく加工しやすい。そのため、建築資材・加工品原料としてよく用いられる。葉鞘(haru)は、タバコやビンロウジなどを入れるバッグ(lopa-lopa)に加工されるが、その場合、丈夫で長持ちするlapaunoの葉鞘がよく用いられる。またlapaunoの小葉(wate oku)は長持ちするため屋根材として利用される。	+	+	+	-	低	●●
2	Hapau	Sago kayu	最も樹高の低い品種だが澱粉含有量が多い。そのため、Ipa kala (タロイモ・サゴ)と呼ばれる。葉柄には刺がない。サゴ澱粉は、赤みを帯びている。	tutupola の原料として好まれる。hapauの小葉で葺いた屋根は2-3年は長持ちする。屋根材としてよく利用される。	-	+	+	-	高	●●●
3	Wakano	?	葉柄には長く鋭いとげがある。澱粉は赤味を帯びている。	小葉は屋根材として利用。pohai と呼ばれるサゴ澱粉貯蔵器にサゴ澱粉を詰めて川につけて保存すること。alolo というが、長期に渡り alolo を行うと、酸味を帯びてくることがある。しかし、この品種は酸味を帯びにくく、食味が低下しない。	-	-	-	+	低	●
4	Luliluli	Sago Duri Panjang	葉柄には刺がある。澱粉は白色で、Lusia と並び、この品種から取れた澱粉で作ったパベダは Lusia と並んで最も美味であると考えられる。	葉柄はやわらかく真直ぐで加工しやすいため、建築資材・加工品原料としてよく利用される。小葉は屋根材として利用される。alolo を長期にわたって行っても食味が低下しない。	+	+	-	+	高	●●●●
5	Haukuku	?	葉柄には刺がある。澱粉は白色。	葉柄は、lapauno や luliluli と同様、やわらかく真直ぐで加工しやすい。建築資材・加工品原料としてよく利用される。小葉は、屋根材として利用される。	+	-	-	-	低	●
6	Omahea	Sago Duri Pendek	葉柄には短い刺がある。澱粉は白色。	葉柄は曲がっており、壁材には利用できない。また、小葉は長持ちしないため、屋根材として利用されることも無い。	-	-	-	-	高	●●
7	Lusia	?	最も高く成長する品種のひとつ。葉柄には棘がある。澱粉は白色で、粘性が高く、最も美味であると考えられる。	この品種の葉で屋根を葺くと長持ちしない。葉柄はやわらかく真直ぐで加工しやすい。壁材として用いられる。	+	-	-	-	低	●

出所：聞き取り調査より作成。

その他にも、生サゴは tutupola と呼ばれるサゴケーキに加工される。日陰干しにしたサゴを篩いにかけて、竹に詰めて焼く。焼きたての tutupola は少しざらざらした舌触りがするがパンのようで柔らかい。それをナイフで切り、藁藁の上で天日干しにして木のようにかたくなったものを保管する。普通、tutupola は甘いコーヒーにつけて食べられている。

生サゴは小学校の教員や村長などにごく稀に売られることがあるが、村人同士の間で商品として取引されることは稀である。tutupola は、自家消費される以外には、極少量ではあるが、沿岸部の村で販売されたり、沿岸部の村に暮らす親戚や友人などへのお土産として運ばれたりもする。

マヌセラ村で摂取されている主要な主食食物（エネルギー源）には、サゴの他にも、サツマイモ、バナナ、タロイモ、キャッサバがある。これらいくつかの主食食物のなかでもサゴはエネルギー源として極めて重要な位置を占めている。

2003年6月5日から8月30日までの間、食事時にランダムに世帯を訪問して、食事の前後に主食食物の重量を計量して摂取量を求めた。それによると、これら主食食物から得られた全エネルギー量のうち76%はサゴが占めていた（図3）。サゴヤシの次に重要なのはサツマイモだが、主食食物が提供するエネルギー量のうちの7%を占めるにすぎない。

サゴの主食としての重要性は、1年を通して一貫している。筆者は1回の調査期間を18日から22日間として、2003年5月から2004年3月までの間に4期の調査期間を設け、食卓に上った食物種に関するデータを収集した。⁸⁾ この調査を基に、主食食物の摂食頻度を示したのが図4で

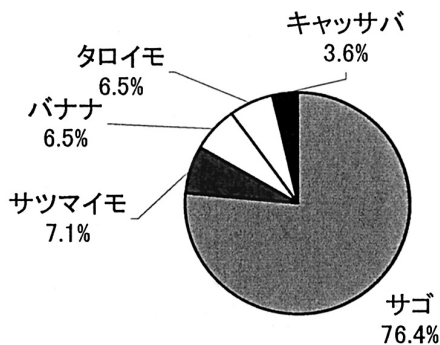


図3 主食食物摂取割合（エネルギー比）

出所：フィールド調査より。

注：1) 朝食19回（摂食者92人）、昼食17回（92人）、夕食21回（115人）の食事における主要主食食物の摂取量に基づく。

2) 2003年6月5日から8月30日までの間、食事時にランダムに世帯を訪問して、食事の前後に主要主食食物の重量を計算することで、摂取量を求めた。

3) エネルギー量は、単位可食部重量あたり生サゴ2,210kcal/kg、サツマイモ770kcal/kg、バナナ1,150kcal/kg、タロイモ1,300kcal/kg、キャッサバ1,490kcal/kgとして算出した〔Ohtsuka and Suzuki 1990: 228〕。

8) 食事調査の期間と対象は、第1期：2003年5月24日～6月13日の21日間（19世帯対象、1,141回分の食事内容）、第2期：2003年7月27日～8月16日の21日間（16世帯対象、875回分の食事内容）、第3期：2003年11月24日～12月15日の22日間（17世帯対象、948回分の食事内容）、第4期：2004年2月16日～3月4日の18日間（15世帯対象、805回分の食事内容）となっている。この調査では、女性インフォーマントに、食事をとる度に献立にのぼった食物の種類とその入手経路（採取・収穫、贈与、購買）を調査シートに記入するように依頼した。調査期間中は毎日調査世帯を巡回し、記入事項を確認した。

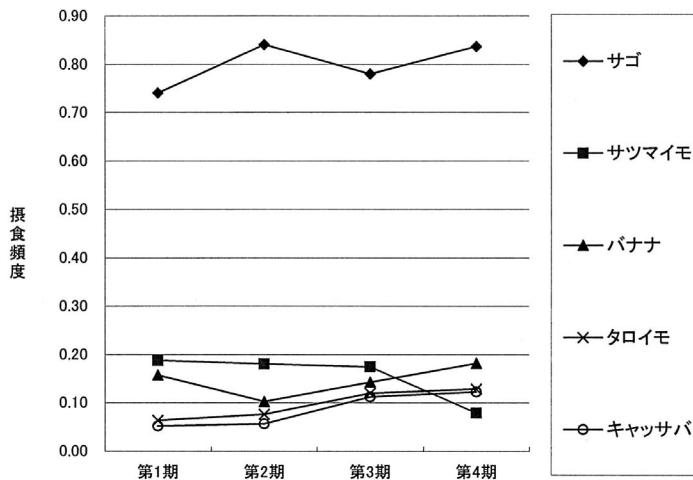


図4 主食食物の摂食頻度

出所：フィールド調査より。

注：1) 摂食頻度は全食事回数に対する出現回数の比率。

2) 調査データは、インフォーマントに食事の内容を調査シートに記入するように依頼し、調査者が巡回・確認することにより収集した。データ収集の期間と対象は次の通り。①第1期：2003年5月24日～6月13日（21日間）、19世帯対象、1,141回分の食事内容のデータ、②第2期：2003年7月27日～8月16日（21日間）、16世帯対象、875回分の食事内容、③第3期：2003年11月24日～12月15日（22日間）、17世帯対象、948回分の食事内容、④第4期：2004年2月16日～3月4日（18日間）、15世帯対象、805回分の食事内容。なお、住民は1日に3度の食事を採るのが普通である。

ある。摂食頻度は、全食事回数に対する各食物の出現回数の比率で表している。全ての調査期間において、サゴの摂食頻度は0.7以上である。0.15前後で推移する他の主食食物と比べて極めて高い値を示している。ふつう村人は1日に3度の食事を取るが、毎日2回以上はサゴが食卓に上っていることになる。この傾向は通年で認められるものである。マヌセラ村では圧倒的にサゴが重要で、消費量に季節変動の無い、安定的な主食であるといつてよい。⁹⁾

9) 食事調査で献立を調べた全食事回数3,805回のうち、主食食物が献立にのぼった回数は総計4,882例だった。その中で、それぞれの主食食物が占める割合を高いものから並べると、サゴ62.0%、サツマイモ12.5%、バナナ11.4%、タロイモ7.4%、キャッサバ6.5%の順となった。北マルクのハルマヘラ島に暮らすガレラ（Galela）人を対象に同様の調査をした石毛の報告〔石毛 1978: 239〕によると、この地域で最も摂食頻度の高い主食食物はバナナ（28.8%）であり、続いて、サゴ（27.5%）、コメ（17.7%）、キャッサバ（11.7%）、サツマイモ（8.6%）、小麦粉（4.2%）の順となっている。筆者がインドネシア東部島嶼部（セラム島、ケイ諸島、アルー諸島、サンギヘ諸島、タラウド諸島、ハルマヘラ島）を歩いたときの印象に基づいても、セラム島内陸部のサゴ依存度は、他地域に比べて非常に高いと思われる。

III-4 高地民のサゴ依存の背景

サゴヤシの分布域は標高700m程度までと考えられているので[Rasyad and Wasito 1986: 2], マヌセラ村のサゴヤシは分布限界に近いところに生育しているといっていよう。

マヌセラ村におけるサゴ澱粉の計量調査の結果に基づく、サゴヤシ1本当たりの平均澱粉採取量(乾重量)は68kg/本(±40kg)で、レンジは18kgから188kgまでと大きな幅があった(表4)。ropu-ropuの段階にあるluiluliに見られるように、同じ品種で同じ生育段階にある個体間で澱粉量に違いがみられた。¹⁰⁾ また、品種間でも大きな差がみられた(表5)。

表6に示されるように、マヌセラ村におけるサゴヤシ1本当たりの平均澱粉採取量は他地域と比べてかなり低い。セラム島の沿岸部におけるサゴヤシ1本当たりの平均澱粉採取量を165kg/本であるとする報告があるが[Ellen 1979a: 49], それと比較しても2.5倍の開きがある。村人によると、比較的高度の高いマヌセラ村は気候が冷涼なためサゴヤシの生育が遅く、1本のサゴヤシに含まれる澱粉量も低地と比べてずい分少ないという。¹¹⁾

セラム島高地民がいつごろからこの地域でサゴヤシを栽培するようになったのかは不明だ

表4 採取されたサゴ澱粉量

事例番号	品種	成長段階	幹長(m)	直径(cm)	Otoni数	Otoni平均長(m)	サゴ採取量(乾重量:kg/本)	労働投下量(人・日/本)
20	Omahea	Upepoto	6.5	44	3	2.2	70	13
31	Omahea	Upepoto	5.1	53	3	1.7	39	7
38	Omahea	Ropu-ropu	6.0	55	4	1.5	101	18
9	Omahea	Ropu-ropu	5.0	45	2	2.5	55	7
15	Omahea	Ropu-ropu	9.0	55	6	1.5	124	14
14	Omahea	Ropu-ropu	8.8	53	6	1.5	67	11
42	Luiluli	Upepoto	9.5	60	5	1.9	98	17
43	Luiluli	Upepoto	11.5	55	6	1.9	93	17
7	Luiluli	Upepoto	8.7	60	5	1.7	78	13
6	Luiluli	Upepoto	7.8	45	5	1.6	76	18
41	Luiluli	Upepoto	8.0	50	4	2.0	61	10

10) 村人によると、樹高の高いサゴヤシでも、伐採してみなければ澱粉を多く含んでいるかどうかはわからないという。伐採して髄が湿り気を帯びているサゴヤシ(wakuhasia)は澱粉含有量が少なく、乾いているもの(malahua)は澱粉含有量が多いという。髄が湿っているサゴヤシの場合、幹の上部付近の髄には澱粉がほとんど含まれていないことが多い。そのため、根元に近いほうからサゴヤシの髄を掻き出してゆくが幹の上部に達しないうちに、捨てられてしまうものもある。髄の乾いたサゴヤシから採れるのは、papedaにしたときに粘性の低い澱粉(ipia katitiki)である。ぶつぶつと切れてしまう papeda は食味が落ちるとされている。そのため、koua (*Eugenia aqua*) と呼ばれる植物の樹皮を鍋で茹で、その茹で汁を生サゴに混ぜて papeda を作る。このようにすると、粘性の高い「旨い」 papeda ができるといふ。

11) Ellen [2004: 603] は、南海岸沿岸部で伐採されたサゴヤシの平均幹長を6.95m (n=13) と報告している。マヌセラ村で観察されたサゴヤシの平均幹長は7.4m (n=41) であり、低地のサゴヤシと比べて遜色はない。村人は「高地のサゴヤシは高く伸びない」と言うが、このデータを見る限りそれは当てはまらない。

表4—続き

事例 番号	品種	成長段階	幹長 (m)	直径 (cm)	Otoni数	Otoni 平均 長 (m)	サゴ採取量 (乾重量:kg/本)	労働投下量 (人・日/本)
19	Luiluli	Upepoto	8.5	50	3	2.8	59	14
11	Luiluli	Ropu-ropu	8.7	54	6	1.5	111	15
10	Luiluli	Ropu-ropu	8.3	55	5	1.7	79	19
13	Luiluli	Ropu-ropu	7.1	50	4	1.8	64	18
25	Luiluli	Ropu-ropu	6.0	53	4	1.5	58	18
40	Luiluli	Ropu-ropu	6.4	50	4	1.6	48	11
26	Luiluli	Ropu-ropu	5.4	50	3	1.8	48	8
27	Luiluli	Ropu-ropu	6.6	55	3	2.2	53	7
28	Luiluli	Ropu-ropu	6.0	50	3	2.0	32	7
24	Lapauno	Upepoto	8.2	50	4	2.1	28	14
37	Lapauno	Ropu-ropu	10.2	65	8	1.3	160	34
35	Lapauno	Ropu-ropu	12.0	55	6	2.0	188	25
22	Lapauno	Ropu-ropu	11.5	53	7	1.6	184	32
12	Lapauno	Ropu-ropu	16.7	50	5	3.3	80	20
36	Haukuku	Ropu-ropu	7.0	52	4	1.8	88	18
18	Hapau	Upepoto	6.6	50	4	1.7	59	8
8	Hapau	Upepoto	6.7	53	4	1.7	58	11
29	Hapau	Upepoto	4.8	50	3	1.6	45	9
16	Hapau	Upepoto	5.5	45	3	1.8	42	12
30	Hapau	Upepoto	5.0	50	3	1.7	42	8
4	Hapau	Upepoto	8.7	45	3	2.9	41	6
5	Hapau	Upepoto	4.6	58	3	1.5	32	17
23	Hapau	Upepoto	4.0	45	?	n.a.	30	5
3	Hapau	Upepoto	7.0	50	3	2.3	27	4
21	Hapau	Upepoto	4.1	40	2	2.1	18	7
39	Hapau	Ropu-ropu	6.6	53	4	1.7	80	18
17	Hapau	Ropu-ropu	4.8	47	3	1.6	46	9
33	Hapau	Ropu-ropu	7.7	50	4	1.9	50	15
32	Hapau	Ropu-ropu	6.0	46	3	2.0	36	6
34	Hapau	Ropu-ropu	6.5	50	3	2.2	36	13
平均			7.4	51	4.1	1.9	68	13.5

出所：フィールド調査より作成。

注：1) 2003年7月初旬から8月中旬にかけて筆者が直接観察することのできたサゴ採取41事例（41本のサゴヤシからの15世帯のサゴ採取事例）。事例番号は表8のそれと対応している。なお、本表ではサゴ採取量を測定できなかった事例1および事例2を掲載していない。

2) 品種については別表参照。

3) サゴヤシの成長段階類型については表1参照。

4) サゴ採取では、サゴヤシの幹を縦に2つに割り、鉤型をした wetikai と呼ばれる道具で髓をたたいて取り出す。この細かく粉碎された髓を水で洗い、沈殿した澱粉を採取する。サゴヤシの幹を縦に2つに割る際、適当な長さで幹を区切る。この区切られた幹が otoni である。otoni を縦に2つに裂いたものは、faani と呼ばれる。普通、1日に、1人当たり1 faani か1 otoni のサゴヤシをたたいて髓を取り出す。

5) サゴ澱粉は、サゴの小葉で編んで作った容器（ana）か、サゴの葉柄の基部で作った容器（pohai）に詰められ貯蔵される。サゴ澱粉は、ana もしくは pohai に詰められた後、1日以上経た、十分に水気の取れたものをバネばかりで計量して求めた。これは生サゴで重量比で45%の水分を含む [Ohtsuka and Suzuki 1990: 228]。したがって、計量した生サゴ重量×0.55により乾重量を求めた。

笹岡：サゴヤシを保有することの意味

表5 澱粉採取量

品種	平均澱粉採取量 (湿重量：kg/本)	標準偏差 (kg)	サンプル数
Lapauno	232.8	70.7	5
Hapau	77.7	15.2	15
Wakano	n.a.	—	—
Luliluli	124.6	21.8	14
Haukuku	160.0	—	1
Omahea	138.0	31.0	6
Lusia	n.a.	—	—

出所：フィールド調査より。

表6 各地域におけるサゴヤシ1本当たり澱粉採取量

地 域	調査地の 標高 (m)	1本当たり 澱粉採取量 (kg/本)	レンジ	サンプル数	出 所
Manusela, Seram	730	68	18–188	41	フィールド調査
Oriomo, Papua New Guinea	10	66	29–104	8	[Ohtsuka 1983: 98]
Sanio- Hiowe upper Sepik, Papua New Guinea	90	87	28–205	7	[Townsend 1974: 227]
Siuhamason, Papua New Guinea	100–200	106	28–239	13	[須田 1995: 1–7]
Siuhamason, Papua New Guinea	100–200	165	115–265	6	[須田 1995: 1–7]
South Central Seram, Indonesia	沿岸低地	165	n.a.	?	[Ellen 1979: 49]
Sulawesi	沿岸低地	203	95–445	31	[遅沢 1990 (山本 1998: 78 からの引用)]
Baroi, Purari delta	低 地	134	38–359	18	[Ulijaszek and Poraituk 1981 (Ohtsuka 1983: 98 からの引用)]
East Sepik, Papua New Guinea	低 地	198	106–279	8	[Shimoda <i>et al.</i> 1986: 101]

が、ある時期にこの地域にサゴヤシが移植されたことはほぼ間違いない。村には ipia nifotu (1番目のサゴヤシ) と呼ばれる、この地域で最初に植えられたと考えられているサゴヤシの株が現在も残っている。

セラム島高地民は生育限界に近く、必ずしもサゴヤシ生育適地とはいえない環境でありながらも、サゴヤシを生活の糧としてきたわけだが、それには、いったいどのような背景があるのだろうか。栽培（半栽培）作物としてのサゴヤシの優位性については、従来、次の点が指摘されてきた（例えば [大塚 1994: 59–64; 2002: 57–59; 遅沢 1995: 111–112] など）。

第一に、サゴヤシには収穫の季節がなく、1年中好きなときに収穫が可能である。成熟した

サゴヤシは、澱粉を相当な期間（マヌセラ村では2年から3年）にわたって維持している。したがって、いつ採取するかは人間側の都合を優先することができ、他の生業と組み合わせやすい。マヌセラ村では、長期保存が可能な穀類は、トウモロコシを除いて生産されていないため、生きたまま食料を貯蔵していると言ってよいサゴヤシのこのような特徴は特に重要である。一方、収穫時期が植えつけからの経過時間によってある程度決まってしまうイモ類やバナナについては植栽時期をずらしたり、植栽から収穫までの期間の異なる多品種を植えつけたりするなど周年収穫ができるよう工夫もなされているが、収穫時期の柔軟性はサゴヤシに劣るといってよい。

第二に労働を投入して収穫するまでの時間が極めて短い。マヌセラ村では、既存のサゴ洗い場を使えば、サゴを伐採して遅くとも半日後には澱粉を採取できる。自分でサゴ洗いの桶を設置する場合も、伐採した翌日には澱粉を収穫できる。食物が不足したときにすぐに食物を供給しうる、という利点がある。

第三に、気候変動や病害虫、そして野生動物の食害に強いいため長期安定的に収穫が可能である。村の古老によると、マヌセラ村における主食作物（サゴヤシ、サツマイモ、バナナ、タロイモ、キャッサバ）のなかで、これまでに長びく旱魃などによって収穫量に大きな影響を及ぼした作物はないとのことだが、病害虫被害については、2000年以降、バナナの葉が黄色く変色し実が腐ってしまう病気が集落付近を中心に広がっている。タロイモには小さな虫がつくことがあるが、収穫量を大きく減らすような被害はこれまでのところ生じていない。サゴヤシについては、オサゾウムシの食害でサゴヤシが枯死するといった報告があるが〔三橋・佐藤1994: 17〕、セラム島高地ではそのような事例は目撃されていない。¹²⁾ セラム島高地で主食作物に大きなダメージを与えているのは、イノシシとインコの食害である。¹³⁾ イノシシはイモ類（サツマイモ、タロイモ、キャッサバ）を襲い、畑全体の作物を全滅させることもあるという。一方、インコはバナナに対して被害を及ぼしている。これらの事を踏まえると、マヌセラ村においてサゴヤシは、イモ類やバナナと比較して鳥獣・病害虫に対する耐性が高いといえる。

第四に生産効率（投下労働力当たりの食物エネルギー収穫量）が高いという点である。それは焼畑農耕が、耕作地の伐採、整地、火入れなどの多くの労働投入を必要とするのに対して、サゴヤシは収穫時を除くと大きな労働投入が必要ないことに由来している。サゴ食民であるニ

12) 集落がまだケセイラトゥと呼ばれる地域にあった頃（少なくとも1930年以前）に、村のほとんどのサゴヤシが枯死するという事件が起きている。その理由は不明だが、他村の者によって pamalai とよばれる植物（一種の呪物）がサゴヤシ林にばら撒かれ、その呪術的な力によってサゴヤシが枯れてしまったのだと村人は解釈していた。この時の被害は深刻で、サゴが不足したためカニケ村までサゴを買いに行った者もいたという。なおこの事件の後には、サゴヤシの生産に大きなダメージを与えるような被害は生じていない。

13) 他地域で報告されているような畑作物に対するノネズミの被害は深刻ではない。

ユーギニア低湿地のウォニエ村（ギデラ人）を調査した Ohtsuka [1983: 134] によると、サゴ採取の生産効率が焼畑のそれと比べて2倍も高かったという。マヌセラ村における1本当たりサゴ澱粉量はウォニエ村の事例とほぼ同じ値であり [ibid.: 98], 両者の間にサゴ採取技術に大きな違いが無いので、サゴ採取の生産効率はウォニエ村のそれとほぼ同程度であると考えられる。しかし、比較的標高が高く冷涼なマヌセラ村では、低地よりも腐植分解が遅いために土壌肥沃度が高く農地の生産性が高いと考えられる。また、イノシシの食害がそれほど深刻ではなく、畑に防護柵を設ける村人がほとんどいない。したがって、マヌセラ村ではサゴ採取と焼畑農耕の生産効率にはウォニエ村ほどの大きな差は無いかもしれないが、村人自身はイモ類・バナナの農耕よりもサゴ半栽培・採取の方が、手間がかからないと考えていた。¹⁴⁾

以上述べてきたように、サゴヤシは作物として優れた点を持っている。しかし、サゴに強く依存する理由として人々が意識しているのは、これらの点よりはむしろ、サゴの食物としての価値である。サゴを毎日のように食べていること理由として、村人は他の主食食物と比較してサゴのほうが「旨い」ことを強調する。村人が主食をどのような観点で評価しているか聞き取りを行ったところ、①腹持ちが良いこと、②喉が渇かず、農作業などを行い易いこと、③毎日食べていても飽きないこと、の3点が浮かび上がった。そこで、23人の村の男女をランダムに選び、主要な主食食物について、これらの点について1から5までの評価得点をつけてもらった。

その結果、「腹持ちの良さ」という点では、4.4の評価得点（平均）を得たサゴを筆頭に、サツマイモ（3.6）、キャッサバ（3.3）、タロイモ（3.2）、バナナ（2.7）の順となった。また、「喉が渇きにくい」という点では、サツマイモ（2.5）、キャッサバ、タロイモ（どちらも2.3）、そしてバナナ（2.2）を大きく引き離して、サゴ（4.7）が高い得点を得ている。また、「飽きが来ない」という点でも同様に、サゴ（4.8）は他の主食食物と大きく差をつけて（サツマイモ: 2.7、キャッサバ: 2.6、タロイモ: 2.6、バナナ: 2.3）、高く評価されていた（図5）。¹⁵⁾

14) 上記の点以外にも、マラリアに由来する鉄欠乏性貧血の予防に役に立っているという指摘もある。サゴヤシの生育地はマラリアの多発地帯でもある。サゴには鉄分が多く含まれる（可食部100g当たり4.5mgの鉄を含む）ため、サゴ食がマラリアによる鉄欠乏性貧血の予防に貢献しているという [大塚 1996: 62-63]。

15) マヌセラ村では、米が食されることはほとんど無いに等しい。麓の村に買い物に向った者の一部が、ごく稀にわずかな量を買ってくることがあるだけである。計3,805回の食事調査（注9を参照）でも、米が食卓に上ったのはわずか10回にすぎなかった。ところでインドネシアでは、「進歩」の象徴とみなされている米との対比のなかで、サゴは「怠け者の食べ物」であり、「後進性」の象徴とみなされることが多い [Rijksen and Persoon 1991: 98-100]。スラウエシ島のルウ地方で調査をした遅沢は、米は「金で買われたもの」だが、サゴは無償で手に入るため、サゴ食には「貧しい」というイメージがもたれており、村人たちは村外の者に対して、サゴ食を恥ずかしく思っていると述べている [遅沢 1990: 54]。マヌセラ村でも、米は現金を出さねば手に入れることのできない「高価な」食物であり、そのことが米の摂食頻度が低いことの背景のひとつにある。しかし、サゴが「貧しさ」と結びつけられて否定的に語られることはなく、村人は米よりもサゴが劣った食物であると考えて

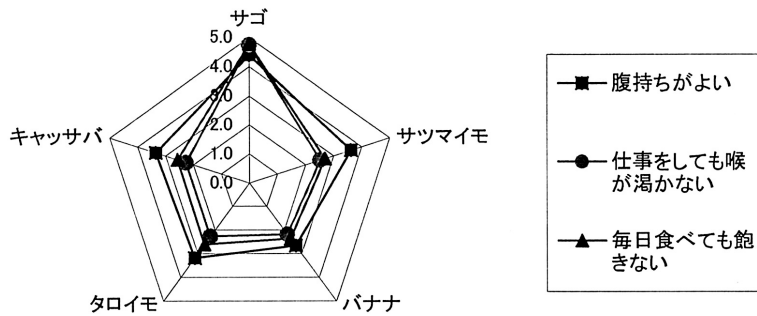


図5 主食食物の評価

出所：フィールド調査より作成。

注：23人の村人を対象に、主食食物に対する村人自身の評価基準（① 腹持ちが良いこと、② 喉が乾かず、農作業などを行い易いこと、③ 毎日食べていても飽きないこと）に従って、それぞれの点について1-5までの得点をつけてもらった（高得点ほどプラスの評価となる）。

人々がサゴに強く依存した暮らしを営んでいる背景として、収穫時期の柔軟性、収穫の即時性、病虫害・食害への耐性、そして生産効率の高さといった、サゴヤシが有する栽培学的優位性を指摘することは可能であろう。しかし、これはあくまでも観察者の立場からの説明にすぎず、¹⁶⁾ 村人はそれを明確に意識しているわけではない。むしろ、住民の意味づけに着目してみるならば、「腹持ちがよい」「喉が渇きにくい」、そして「飽きがこない」といった点で他の主食食物と比較して高い評価を得ていることが、サゴ依存の重要な要因となっている。¹⁷⁾

いらないようであった。「主食としてサゴと米のどちらかを選ぶとしたら、どちらを選ぶか」との問いに対し、ほとんどの村人が「サゴを選ぶ」と答えた。また、彼らのなかには「米を毎日食べると便秘になってしまう」など、米に対して否定的な意見を述べる者もいた。むしろ、このような表面的な聞き取りだけでは、実際に彼らが米やサゴにどのような価値を付与しているのか確かなことはわからない。しかし、少なくとも「村外者」である筆者への語りのなかでは、村人がサゴ食にネガティブなイメージを抱いている様子はみいだせなかった。

16) 観察者の立場からのみ村人の行動を説明してしまうと、より広い社会的脈絡の中におけるその理由づけを把握し損ねる恐れがある。観察者の論理と現地の論理にズレが生じる可能性については豊田 [1995: 24; 2003: 107-108] を参照。

17) サゴ食文化圏にあっても、地域によっては、サゴは焼畑からの収穫物が少ないときに消費される補助食物にすぎず、必ずしも食物として高い評価を得ているわけではない [豊田 2003: 98-99]。セラム島内陸高地民が、サゴヤシの生育が遅く澱粉生産量が比較的少ない標高の高い地域に暮らしながらも、イモ類やバナナよりもサゴを最も重要な主食として主体的に選び取っていることは興味深い。本稿では、このようなサゴへの嗜好と依存の歴史的文化的な背景について、しっかりとした検討を加えることができていない。それは今後の課題としたい。

IV サゴヤシ利用の社会制度

IV-1 サゴヤシの保有と相続の社会的取り決め

セラム島高地では「このサゴヤシ（林）は×××のもの」といった具合に、すべてのサゴヤシ（林）に対して特定の帰属先が認識されている（稀にその認識に齟齬が生じることもある）。サゴヤシが帰属すると認識されている個人や集団は ipia kua（以下、状況に応じて「保有者（集団）」と記す）と呼ばれ、サゴヤシを利用（伐採して澱粉を採取）したり利用権を他者に譲渡したり、それらの権利を誰に相続させるかを決定する権利（保有権）を有している。

保有者には、世帯（世帯主）、親族関係にある複数世帯（キョウダイ関係にある複数世帯や共通の父方祖父を持つ複数世帯など）、そして、氏族集団 soa に属する全構成員などがあり、その規模はさまざまである。

サゴヤシ林を造成した人がその「保有者」となるが、そのような林も造成した者に複数の男子がいれば、次の世代には、彼らの複数世帯共有となるのが普通である。その後、何世代も経て造成者との明確な系譜関係がわからなくなり「共通の祖先が植えたもの」といった程度の認識しかない古いサゴヤシ林は、植栽者の属する soa の共有となりうる。また、保有の歴史（誰が造成し、権利がどう継承されてきたか）に関する正しい知識が失われることで、本来はより大きな保有集団の保有であったものが、そこを慣例的に利用してきた者の子孫の保有となる場合もある。さらに、共有集団の成員の他出や死亡によって複数世帯共有が世帯保有に変ることもありうる。このように、サゴヤシ林に成立している保有形態（保有集団の規模）は様々に変化する。

世帯保有、複数世帯共有、soa 共有といっても、実際に保有権を持つとされるのは、普通その男性成員である。女子は結婚すると夫の保有する（あるいは夫が所属する共有集団が保有する）サゴヤシ林を夫と共に利用するものだと考えられている。

soa の成員権は父系を通じて継承される。サゴヤシの保有権も父系を通じて相続されている。しかし、サゴヤシ林の保有に関する聞き取りでは、男子が生まれず、また男子の養子を取ることができなかった者が、自身の保有するサゴヤシを娘に相続させた事例や、老後の面倒を見てくれた娘にサゴヤシの権利を提供した事例もあった。ただし、これらのサゴヤシの保有権も次の代にはその女性の息子達が相続するものと考えられていた。

サゴヤシ林の保有関係を聞いてみると、図6に模式的に示すように、Aの保有するサゴヤシ林のなかに1株だけ飛び地のように、Bが保有するサゴヤシが存在することが少なくない。その一例として、マロイ（クラン名）の O・Mal ら4世帯が保有するサゴヤシがある。

このサゴヤシは、アマヌクアニ・ペレアサタウン（サブクラン名）に属する Yp・Ap ら4世帯が共有するサソル（地名）のサゴヤシ林のなかに1株だけ存在している。¹⁸⁾ これは O・Mal

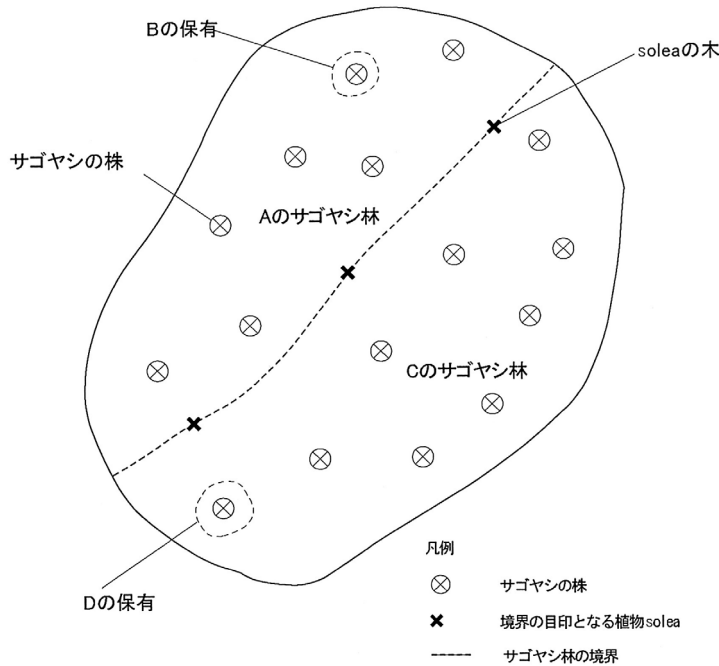


図6 サゴヤシ林 (soma) の保有関係

注：1） Aが保有するサゴヤシ林内に他者（B）が保有するサゴヤシの株が存在する。サゴヤシは次から次へと吸枝を伸ばして新しい株を発生させる。そのため、サゴ採取のために成熟した株を伐採しても株は残る。それに対する保有権は、CやDの子孫に男系を通じて継承されてゆく。

2) AとBのサゴヤシ林の境界に自然の標識（小川など）がない場合、soleaと呼ばれる赤紫をした葉をつける植物を植えることがよくある。山刀で頭頂部を伐っても、めったに枯れる事が無く目立つため、境界線の目印の役目を果たしている。

の父 M・Mal が 1960 年ころに植えたものである。サソルを通りがかった M・Mal は、当時その保有者であった Yp・Ap の祖先から吸枝を譲り受けた。母樹の根元部を切断して吸枝を採取したが、まだ小さかったので、しばらくそこに仮植えさせてもらって、ある程度大きくなるまで育ててから、自分のサゴヤシ林に移植することにした。しかし、その後、しばらく M・Mal はそのことを忘れてしまっていた。気がついたときには、その個体は移植することが不可能なまでに大きく成長していた。このサゴヤシは、M・Mal が植えたという事実が尊重され、その後も「M・Mal のもの」と認識された。M・Mal が死亡した現在も、O・Mal や O・Mal

18) サゴヤシ林は、集落からそれほど離れていない地域の河川や小川沿いの湿地に作られている。集落周辺のこれらの地域一帯は、かつて人の手で大木が伐採されたことがあり、現在は畑作用地などに利用されている土地である。これらの土地は、基本的にはそれぞれの soa が保有している。サソルの土地はアマヌクアニが保有する土地である。

のイトコ（M・Malのオトコ・キョウダイの息子たち）たち4世帯に共有されている。このサゴヤシの株に対する権利は、O・Malの子孫に今後も引き継がれてゆくという。この事例は、「サゴヤシは植えた人のモノである」という原理の存在をよく表している。この「労働所有の原理」は、他のサゴ食文化圏でも広くみられる〔秋道 2004: 56; Dwyer and Minnegal 1999: 366, 369; 宮内 1998: 133; 吉田 1993: 144〕。¹⁹⁾

ちなみに、サゴヤシの株の周囲の土地は、その株の保有者が事実上支配する土地となる。例えばサゴヤシの株のすぐそばに、他者が何か別の作物を植える事はできない。つまり、サゴヤシの株の保有はその周囲の土地占有も含むものであるといえる。²⁰⁾ サゴヤシに限らず、他者が保有する土地にマンゴーやカカオなどの有用樹種を植えた場合、植えた人はその周囲の土地を占有できる。土地を長期にわたり占有できるからであろう、永年性作物を他者の土地に植える場合、その土地の保有者（その土地を保有する soa の長老など）に許可を得るべきだと考えられている。一方、単年性作物を植えたり、畑を造成したりする場合は、保有者に断りを入れる必要は無い。

サゴヤシの保有者は、年老いて働けなくなったり、病気や老衰で自分の死期が近づいてきたと感じたりすると、家族や親族（妻、オトコ・キョウダイ、子供、甥など）に、自分が保有するサゴヤシの歴史（誰が植え、どのように相続されてきたか）や誰に相続させるかといったことに関する言いつけ、itinau を伝える。これによって、資源を分割相続させたり（例えば、A のサゴヤシ林は甲に使わせ、B のサゴヤシ林は乙に使わせるように、といった itinau が残されることがある）、先述のように女性に権利を与えたりすることもある。あるサゴヤシが特定の個人や集団のものであるということが話題になるとき、祖先の残した itinau が必ずといってよいほど問題となる。特定の itinau が残されていない場合、それらの有用樹木に対する権利は、彼の息子や彼のオトコ・キョウダイの息子（息子も甥も親族名称は uasena で同じ）によって継承されることが当然だと認知されている。このように、資源に対する権利の正当性の根拠になっているのは、itinau であったり、父系を通じた系譜関係の存在であったりする。したがって、「樹木を誰が植えたか」「樹木に対する権利がどのように相続されたか（どのような itinau があったか）」といった「保有の歴史」についての知識は、当の資源に対する権利が誰に帰属するかを人々に認知させる上で非常に大きな力をもつ。²¹⁾

19) ある人（集団）の土地に別の人（集団）の保有する樹木が、飛び地のように存在するという事例は、ドリアン（*Durio zibethinus*）、ランサツ（*Lansium domesticum*）、そしてビンロウヤシ（*Areca* spp.）などの永年性の有用植物についても確認できる。

20) スラウェシのルウ地方で調査をした遅沢〔1990: 157-160〕も、サゴヤシの株の保有が周囲の土地占有を伴うと報告している。そこでは、株の保有が土地占有を含むがゆえに、澱粉採取のためではなく、土地占有のための指標作りのために（所有権の不明瞭な土地の支配のために）サゴヤシが移植されることもあるという。

21) 土地・資源の保有原理や、「保有の歴史」に対する知識と権力の関係などについては、慣習的な森 ↗

「保有の歴史」についての正しい知識を次世代に伝えないで、本来は他者が保有すべき土地・資源を自分のものにしてしまう行為は kanene と呼ばれる。例えば、A のサゴヤシ林に、B が飛び地のようにサゴヤシの株を保有している場合、B が若くして亡くなり、保有関係の子孫に伝えることができなかつたときなどは、A による kanene が起きやすい状況といえる。しかし、通常は B の子孫が大きくなってから A は彼らに保有関係についての正しい知識を伝える。伝えないで口をつぐむ (hopu asasaua) と、死んでから遺体の口が大きく開いてしまう、と信じられている。kanene は恥ずかしい行為であるばかりか、子孫に災厄を招く可能性もあると考えられている。

IV-2 保有規模と摂食頻度の関係

サゴヤシの保有規模は、世帯により大きな差がある。16世帯、218カ所のサゴヤシ林を対象に、保有しているサゴヤシ林を列挙してもらい、そのそれぞれについて、サゴヤシ林の保有者（保有者集団の規模）とそこにあるサゴヤシの株数について聞きとりを行った。サゴヤシの株は ulue と呼ばれる（図7）。村人は保有するサゴヤシ林にどのくらいの ulue があるか、おおよその数を把握している。もちろん、申告された数は正確さに欠けるかもしれないが、世帯間で保有規模に差があるかを検討するためには充分活用できる。サゴヤシ林は、複数世帯で共有されることが多いので、そこにある ulue の数を、保有者集団の構成世帯数で割り、世帯当たりの保有株数を求めた。表7に示すように、世帯当たり保有サゴヤシ株数には世帯間で1株から

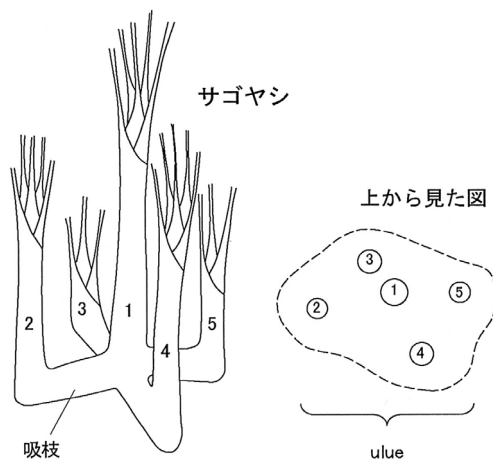


図7 サゴヤシの株 (ulue) の形

注：幹立ちした個体しか書いていないが、実際は多くの若い個体が発生している。

→ 林保有体系を扱う別稿で詳しく論じる予定である。

笹岡：サゴヤシを保有することの意味

表7 サゴヤシ保有規模と世帯内自給性

世帯主略号	保有する サゴヤシ林の数	Σ [ulue 数] / [保有者集団の世帯数]	世帯内自給性	摂食頻度 (摂食割合)	分与割合
Y・Et	1	1	N	n.a.	n.a.
M・Et	3	15	N	0.78	4.8%
H・Et	36	24	N	0.72	4.8%
D・Mal	12	47	N	0.93	16.7%
T・Et	7	49	N	n.a.	n.a.
E・Li	10	58	Y	0.73	89.1%
L・Li	11	91	Y	0.94	5.1%
T・Mah	11	92	N	0.79	4.0%
A・Mal	16	105	N	0.90	0.0%
Yp・Ap	16	106	Y	0.87	0.0%
Yn・Ap	36	120	Y	0.89	0.0%
P・Ap	36	126	Y	0.83	3.8%
Y・Li	4	156	N	0.94	1.7%
A・Ey	24	195	Y	0.78	0.0%
B・Lat	20	219	Y	0.88	0.0%
F・Mas	11	384	Y	0.71	0.0%

出所：フィールド調査より作成。

- 注：1) 一つのサゴヤシから発生した個体の集まり（株）を ulue という。聞き取りでは、自身が保有するサゴヤシ林の地名を挙げてもらい、そのそれぞれのサゴヤシ林にどのくらいの ulue があるかをたずねた。
- 2) 自身の保有するサゴヤシ林だけで食べていけるか否かの質問に対する回答。Y: 食べていける, N: 食べていけない。
- 3) マヌセラ村では食事の単位は世帯である。サゴの摂食頻度は、各世帯の食事回数に占めるサゴ摂食回数の割合である。ここで示している値は、2003年7月27日～8月16日（21日間）の食事調査のデータに基づく。なお、調査データ収集期間中、サゴが尽きたため、森の中の出作り小屋（walale）に居住しながらサゴ採取に従事する世帯が多かった。なお、14世帯のサゴ摂食頻度の平均は0.84であった。
- 4) 分与割合は、サゴの摂食回数に対する、分与されたサゴの出現回数の割合。
- 5) 保有規模と摂食頻度の相関係数は $r = -0.153$ ($n=14$)。有意性検定では $t=0.5365$ （有意確立 $p=0.601$ ）となり、両者に有意な相関は見られなかった。

384株までかなりの差があった。16世帯中、自身が保有するサゴヤシだけで食べてゆけると答えた者は8世帯のみであった。

16世帯中最大のサゴヤシ株数を保有する F・Mas は、Masauna Lakea というサブクランに属している。Masauna Lakea の他の成員はすでに死去するか他所へ転出しているため、Masauna Lakea のサゴヤシ林は、すべて F・Mas の保有となっており、それが世帯当たり保有サゴヤシ株数の多さの理由となっている。世帯当たり保有株数の多い A・Ey や B・Lat が属する氏族集団、Eyale や Latumutuanany は、かつては規模の大きな集団であった。しかし、男子が生まれなかったことや、転出や死去によりそれを構成する世帯が減り、共有集団の規模が縮小したことが、世帯当たり保有規模の大きさの理由となっていると考えられる。一方、保有サゴヤシ株数が少ない Y・Et, M・Et, H・Et が属する Etalo の成員は、サゴヤシの植栽

に熱心な一部の成員を除いておおむねサゴヤシ林の保有規模が小さい。Etaloが集落で最も構成世帯数の多い氏族集団であることや、Etaloの成員が慣習的に利用してきた地域には丘陵地が多く、サゴヤシの植栽適地が少ないことなどが、世帯あたりサゴヤシ保有規模が小さいことの背景にあると考えられる。

図8では、世帯あたり保有株数と同時にサゴの摂食割合（食事にサゴが出てきた割合）が示してある。²²⁾ この図から窺えるように、サゴヤシの株の保有規模はサゴの摂食頻度に大きな影響を与えていないと考えられる。実際、保有規模と摂食頻度には有意な相関が見られなかった($r = -0.153$, $t = 0.5365$, $P = 0.601$)。保有サゴヤシ株数が50株以下の6世帯でも、サゴ摂食頻度は0.7以上となっており、サゴヤシの小規模保有世帯でも、3回の食事のうち2回以上はサゴを食べていることがわかる。

表7より大規模保有者と比べて小規模保有者の分与割合（摂食回数に対する分与されたサゴの出現回数の割合）が高い傾向が見られる。しかし、調査中にサゴが尽き、オジの息子からサゴを分与してもらっていたD・Malや、妻の兄からサゴを分与してもらっていたE・Liを除くと、贈与割合は5%程度であり、彼らが食べているサゴの多くは自分で採取したものであった。

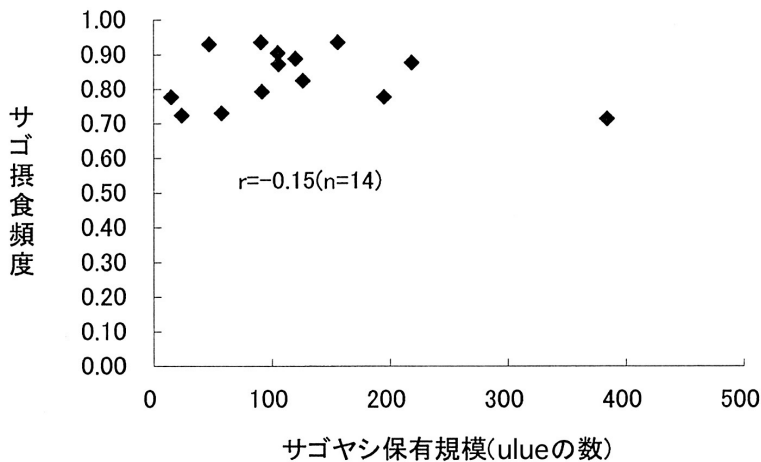


図8 サゴヤシ保有規模とサゴ摂食頻度の関係

22) ここで示しているサゴ摂食頻度のデータは、2003年7月27日から8月16日（21日間）に収集したものである。ちょうどこの時期はfeleinの期間中であった。feleinとは、raja（村の行政の長）の指示に基づいて、村人が指定された期間内に一斉にサゴ採取を行うことである。村人は集落から離れたサゴヤシ林でサゴ採取を行うことがよくあるが、そのあいだ彼らは出作り小屋に泊る。各人がばらばらにサゴ採取を行って集落を離れる時期がずれてしまうと、村で行われる様々な社会活動の運営に支障が出てしまう。村には青年、女性、少年たちがそれぞれ構成する教会関係の組織がある。それぞれの組織が週に一度、礼拝のための集会を開いている。また、村の成人男女が集って行く、集落の路地の草取りや教会や小学校の屋根の葺き替えなどの共益作業もある。feleinはサゴ採取の期間を合わせてこれらの活動をうまく行えるようにするためのものである。

以上のように保有規模の大小に関わりなく、すべての世帯が自ら採取したサゴを高い頻度で食べることができるのは、次節で述べるサゴヤシ林の非排他的利用慣行があるからである。

IV-3 サゴヤシの非排他的利用慣行

サゴヤシの小規模保有者にとっては、自分の保有するサゴヤシ林だけで、必要なときに必要なだけのサゴヤシを得ることは困難である。したがって、自分の保有するサゴヤシだけで食べてゆけない者たちは、サゴヤシを多く持つ者（血縁関係や婚姻関係のある者が選ばれる）に対してサゴヤシを提供してもらうよう乞う（pasua ipia）。

このような要求を受けた者（複数世帯共有のサゴヤシ林の場合、共有集団の年長者）は、自身の保有するサゴヤシがまだ伐採適期に達していないと判断する場合には、成熟するまでもう少し待つように言うこともある（後述するように、近年では伐採適期に達した個体が少なくなってきたおり、upepotoのサゴヤシが譲渡されることも少なくない）。しかし、伐採適期にあるサゴヤシを持っている限り、保有者がその申し出を拒否することは、不可能とは言わないまでも非常に困難である。後述するように、サゴヤシをたくさん持っている者が困窮者にサゴヤシを与えることは、当然のことと考えられており、事実、サゴヤシ（の利用権）は持つ者から持たざる者に頻繁に移譲されている。

2003年7月初旬から8月中旬にかけて筆者が直接観察することのできたサゴ採取43事例（15世帯が行った計43本のサゴヤシからの澱粉採取事例）のうち、20事例は自分（自分が属する共有集団）が保有するサゴヤシを利用し、23事例は他者が保有するサゴヤシを利用していた。他者のサゴヤシを利用した者たちは、父の系譜と母の系譜の双方のイトコ、妻のオトコ・キョウダイ、オンナ・キョウダイの夫など血縁・婚姻のネットワークを通じて、サゴヤシを利用する許可を得ていた（表8）。なお、彼らがサゴヤシの保有者から得ているのは、特定のサゴヤシの立木を利用する権利であり、その権利はサゴ採取を終えた後に消滅する。

サゴヤシの利用権は無償で譲渡されている。利用権を得た非保有者は、保有者に対して収穫した澱粉の一部を分与するよう義務づけられてはいないし、また分与することが望ましいという考えもない。実際、他者（他の保有集団）のサゴヤシを利用した23事例のうち、採取した澱粉の一部を保有者に分与した事例は3事例しかなかった。これらの事例はすべて、サゴ採取の時間がとれない小学校の教員、幼い子を抱えた寡婦、腰痛で働けない者などサゴ採取が困難な者が、自ら、自分の保有するサゴヤシをキョウダイに提供し、採取したサゴ澱粉の一部を分けてもらうよう依頼していた事例である。例えば、小学校の教員は、自分が保有するサゴヤシを姉夫婦に譲渡し、その収穫の一部を分けてもらうよう頼んだ。姉とその夫は、提供されたサゴヤシから、質重量で146kgのサゴを採取した。彼らはそれを均等に分けてから、採取場の横

表8 採取者—保有者関係¹⁾

事例 番号	採取者 ²⁾	サゴヤシ保有者 ³⁾	保有形態	他のサ ゴヤシ利用 ⁴⁾	収穫直後のサゴ 分与の有無 ⁵⁾
1	▲H-Et, ▲A-Ile (H-Et-F-S♀-C♂), ●N-Ile (A-Ile-W)	H-Et-M-S♂ (村外)	世帯	+	無
2	▲H-Et, ▲A-Ile (H-Et-F-S♀-C♂), ●N-Ile (A-Ile-W)	H-Et-M-S♂ (村外)	世帯	+	無
3	▲H-Et	H-Et-M-S♂ (村外)	世帯	+	無
4	▲H-Et, ▲A-Ile (H-Et-F-S♀-C♂), ●N-Ile (A-Ile-W)	H-Et-M-S♂ (村外)	世帯	+	無
5	▲D-Mal, ●H-Mal (D-Mal-W)	D-Mal, D-Mal-F-S♂-C♂ (x2)	複数世帯	-	無
6	▲D-Mal, ●H-Mal (D-Mal-W)	Soa Mal	soa	-	無
7	▲F-Et, ●N-Et (F-Et-W)	F-Et-M-S♂ (村外)	世帯	+	無
8	▲F-Et, ●N-Et (F-Et-W)	F-Et-M-S♂ (村外)	世帯	+	有
9	▲F-Et, ●N-Et (F-Et-W)	F-Et-M-S♂ (村外)	世帯	+	有
10	▲Y-Et, ●H-Et (Y-Et-W)	Y-Et-S♂-W	世帯	+	有 ⁺
11	▲Y-Et, ●H-Et (Y-Et-W)	Y-Et-Fr	複数世帯	+	有
12	▲Y-Et, ●H-Et (Y-Et-W), ▲S-Mal (Y-Et-S♀-H), ●L-Mal (S-Mal-W)	Y-Et-Fr	複数世帯	+	無
13	▲A-Mal, ●H-Mal (A-Mal-W), ▲S-Mal (A-Mal-S♂)	A-Mal-F-F-S♂-C♂	世帯	+	有
14	▲A-Mal, ●H-Mal (A-Mal-W)	A-Mal-W-S♂	複数世帯	+	有
15	▲A-Mal, ●H-Mal (A-Mal-W)	A-Mal-W-S♂	複数世帯	+	無
16	▲M-Et, ●K-Et (M-Et-W)	Soa Latumutany	soa	+	無
17	▲M-Et, ●K-Et (M-Et-W)	K-Et-S♀-H	世帯	+	無
18	▲M-Et, ●K-Et (M-Et-W)	M-Et-F-F-S♂-C♂	世帯	+	有
19	▲Y-Li, ●Y-Et (Y-Li-W-S♂)	Y-Li	世帯	-	有
20	▲T-Et, ▲Y-Lat (Y-L at-W-S♂)	T-Et-W-F-F-S♂-C♂-C♂	世帯	+	無
21	▲T-Et, ▲Y-Lat (T-Et-W-S♂)	T-Et-W-F-F-S♂-C♂-C♂	世帯	+	有
22	▲T-Et, ●A-Et (T-Et-W), ▲E-IlePot (T-Et-F), ●B-IlePot (E-IlePot-W)	T-Et-W-F-F-S♂-C♂-C♂	世帯	+	無
23	▲F-Mas	F-Mas, F-Mas-S♂ (村外)	複数世帯	-	無
24	▲Ya-As, ▲Ya-As (S-As-C♂), ▲Yo-As (S-As-C♂), ●R-As (S-As-W)	S-As	世帯	-	無
25	▲P-Ap, ●H-Ap (P-Ap-W)	P-Ap, P-Ap-S♂, P-Ap-M-S♂-C♂ (x2)	複数世帯	-	有
26	▲P-Ap, ●H-Ap (P-Ap-W)	P-Ap, P-Ap-S♂	複数世帯	-	有
27	▲P-Ap, ●H-Ap (P-Ap-W)	P-Ap, P-Ap-S♂, P-Ap-M-S♂-C♂ (x2)	複数世帯	-	無
28	▲P-Ap, ●H-Ap (P-Ap-W)	P-Ap, P-Ap-S♂, P-Ap-M-S♂-C♂ (x2)	複数世帯	-	有
29	▲P-Ap, ●H-Ap (P-Ap-W)	P-Ap, P-Ap-S♂, P-Ap-M-S♂-C♂ (x2)	複数世帯	-	無
30	▲D-Ap, ●S-As (D-Ap-W)	D-Ap, D-Ap-S♂, D-Ap-F-S♂-C♂-C♂	複数世帯	-	有
31	▲D-Ap, ●S-As (D-Ap-W)	D-Ap, D-Ap-S♂, D-Ap-F-S♂-C♂-C♂	複数世帯	-	無

32	▲D・Ap, ●S・As (D・Ap・W)	D・Ap, D・Ap・S♂, D・Ap・F・S♂・C♂・C♂	複数世帯	—	有
33	▲D・Ap, ●S・As (D・Ap・W)	D・Ap, D・Ap・S♂, D・Ap・F・S♂・C♂・C♂	複数世帯	—	無
34	▲D・Ap, ●S・As (D・Ap・W), ●R・As (D・Ap・F・S♂・C♀・C♀), ▲S・As (R・As・H)	D・Ap, D・Ap・S♂, D・Ap・F・S♂・C♂・C♂	複数世帯	—	無
35	▲D・Ap, ●S・As (D・Ap・W), ●R・As (D・Ap・F・S♂・C♀・C♀), ▲S・As (R・As・H)	D・Ap, D・Ap・S♂, D・Ap・F・S♂・C♂・C♂	複数世帯	—	無
36	▲Y・Ap, ●R・Ap (Y・Ap・W)	Y・Ap	世帯	—	有
37	▲Y・Ap, ●R・Ap (Y・Ap・W), ▲Z・As (R・Ap・S♀・H), ●K・As (Z・As・W)	Y・Ap・F・S♂・C♂・C♂/Y・Ap・W・S♀・C♂	世帯	+	有
38	▲Y・Ap, ●R・Ap (Y・Ap・W), ▲Z・As (R・Ap・S♀・H), ●K・As (Z・As・W)	Y・Ap・F・S♂・C♂・C♂/Y・Ap・W・S♀・C♂	世帯	+	無
39	▲B・Lat, ●A・Lat (B・Lat・W)	B・Lat・W・S♂	世帯	+	有
40	▲B・Lat, ●A・Lat (B・Lat・W)	B・Lat・W・S♂	世帯	+	無
41	▲B・Lat, ●A・Lat (B・Lat・W)	Soa Latumutuanu	soa	—	無
42	▲A・Ey, ●V・Ey (A・Ey・C♂), A n・Ey (A・Ey・W)	A・Ey	世帯	—	有
43	▲A・Ey, ●A n・Ey (A・Ey・W)	Soa Eyale	soa	—	無

出所：聞き取り調査より作成。

注：1) 2003年7月初旬から8月中旬にかけて筆者が直接観察することのできたサゴ採取43事例 (43本のサゴヤシからの15世帯のサゴ採取事例)。

2) ▲男性, ●女性

3) H・Et などとは人名の略号。その他の略号は以下の通り。H：夫, W：妻, S：キョウダイ, C：コードモ, Fr：友人。SとCについてはその直後に性別を略号で示している。ハイフンは関係を示す。採取者や保有者は、略記された者との関係を、これらの略号をハイフンでつなぐことで表示している。例えば、「A・Mat・F・S♂・C♂」の場合、「A・Mal (人名) の祖父のオトコ・キョウダイのムスコ」となる。X2は同じ関係の者が2人いる事を示す。

4) +：他の者 (他の保有集団) のサゴヤシの利用, —：自身の保有する (自身が所属する保有集団の保有する) サゴヤシの利用。

5) 採取したサゴは多くの場合、採取場の横に俵に詰めて貯蔵される。サゴは3カ月は保存が可能なので、その間にサゴが他者に分与されることは十分ありうるが、それはここですべていう分与に含めていない。ここで扱っている「分与の有無」は、収穫直後に他者 (共同でサゴ採取をした場合、共同採取者以外の者) に分与したか否か、である。なお、†の印のついていない事例は、他者のサゴヤシを利用した者が収穫したサゴを保有者に分与した事例である。

に彼らが設置した保有者専用の大きな ana に詰めた。70kg あまりのサゴが、ana に詰められた状態で保有者である教員に提供された。残りの2つの事例も同様に、収穫されたサゴは等分され、保有者専用の ana に詰められた状態で保有者に分与された。

最後に収穫物としてのサゴの分与についても触れておこう。ここでは記述の便宜上、船形の桶に溜まった状態のサゴの一部を収穫直後に分与する場合と、ana や pohai に詰めて貯蔵したサゴの一部を収穫後しばらく経ってから分与する場合とに分け、そのそれぞれについて見てみたい。先の43のサゴ採取事例のうち、収穫直後に他者にサゴを分与した事例は21事例、分与しなかった事例は22事例であった。マヌセラ村では、村人が時期を合わせて一斉にサゴ採取を行う felein と呼ばれる慣行がある。felein が始まると、村人は集落から離れた出作り小屋に泊り込みでサゴ採取を行う（注22参照）。収穫直後に行われた分与の大半は、felein が始まってからまだサゴ採取を行っておらず、集落に残っている近縁の世帯に対して行われていたものである。このとき、loyang と呼ばれる洗面器のような容器1杯分ぐらいのサゴが分与されていた。また、それ以外にも、出作り小屋で共同生活を送る者たちが、同じく loyang 1杯分ぐらいのサゴを交代で負担し、サゴを分け合っていた。

一方、貯蔵されたサゴも、サゴに困窮した村人に対して日常的に分与され続ける。村人が集中的にサゴ採取を行ってから約3カ月後の2003年の11月末から12月中旬にかけて、筆者はモノの分与に関する調査を行ったが、それによると調査対象となった17世帯全てが、loyang 1杯分ぐらいの少量単位でサゴを分与したり、分与してもらったりしていた（表9）。そのうち、8世帯は主にキョウダイなど近縁の親族と「サゴの均衡的交換（サゴを与えた相手から、短期間のうちに、与えたのとはほぼ同量のサゴを受けとるようなやり取り）」を行っていた。マヌセラ村では、家に備蓄していたサゴが底を尽きたものの、悪天候などの理由で集落から離れた貯蔵場（サゴ採取場）までサゴを取りに行けない者などが、キョウダイやイトコなどの親族を相手にサゴを融通してもらい、数日のうちにはほぼ同量のサゴを返済する、ということが慣例的に行われているのである。このように、サゴは世帯間で頻繁に融通されており、収穫されたサゴのすべてが自家消費にまわされることは無いのである。

IV-4 非排他的利用を支える観念

保有者がサゴヤシに対して有する権利は、「求められた場合、それを拒否することが困難である」という意味において、何者にも妨げられない排他的な権利ではない。他者からの制約を受けた権利である。すなわち、保有者は、場合によってはサゴヤシを他者に分与する役割を担わされている存在である。そのことの文化的背景をもう少し掘り下げてみよう。

掛谷〔1983; 1994〕はタンザニア西部の焼畑農耕社会に、「より多くを持つ者が他者に分与することを当然とする社会倫理」に裏打ちされた、モノの偏在化を忌避する社会的メカニズム

笹岡：サゴヤシを保有することの意味

表9 日常的に行われるサゴの分与¹⁾

世帯主 略号	分与した 相手 (延べ人数)	分与した総量 ²⁾	分与して もらった相手 (延べ人数)	分与して もらった総量	「均衡的な交換」 ³⁾ を行った者 (延べ人数)
H・Et	3	1/2 sapei + 2皿	0	—	0
T・Mah	1	1 sapei	3	3 loyang	0
D・Mal	7	6 loyang + 1皿	4	3 loyang + 1皿	4
F・Et	6	4 loyang + 2皿	2	2皿	2
Y・Et	1	1 loyang	1	1 loyang	0
L・Li	2	1 loyang + 1皿	1	1 loyang	0
A・Mal	4	4 loyang	2	2 loyang	2
M・Et	3	2 loyang + 1皿	2	1 loyang + 1皿	1
Y・Li	2	2皿	1	1皿	1
S・As	0	—	2	1 loyang + 1皿	0
P・Ap	3	3 loyang	3	3 loyang	1
Yn・Ap	0	—	2	2 loyang	0
D・Ap	0	—	1	1 loyang	0
Yp・Ap	0	—	2	1 sapei + 1 loyang	0
B・Lat	1	1 loyang	2	2 loyang	1
E・Li	5	5 loyang	2	2 loyang	1
A・Ey	0	—	2	2 loyang	0

出所：フィールド調査より作成。

注：1) 表示しているのは、村人が集中的にサゴを採取してから約3カ月が経った後の、2003年11月24日から12月15日までの22日間にわたるサゴの分与のデータである。

2) あくまでも目安に過ぎないが、「皿」は直径約25cmの皿、「loyang」は直径30–35cm、高さ12–15cmぐらいの洗面器のような器、「sapei」は直径35cm、高さ50–60cmぐらいの逆円錐形の背負い籠である。

3) ここでサゴの「均衡的な交換」と言うのは、「サゴを与えた相手から、与えた日より数日のうちに、与えたのとはほぼ同量のサゴを受けとるようなやり取り」を意味する。家に備蓄していたサゴが底を突いたものの、悪天候などの理由で集落から離れた貯蔵場（サゴ採取場）までサゴを取りに行けない者が、キョウダイやイトコなどの親族を相手にサゴを融通してもらい、数日のうちにほぼ同量のサゴ返済するということが慣例的に行われている。ここで示しているのは、「分与した相手」もしくは「分与してもらった相手」の数のうち、「均衡的な交換」を行った者の数である。

が存在することを明らかにしている。掛谷によると、このような互酬的な分配に人々を駆り立てるのは、突出した財を持つ者への妬みや分与を拒否する者への恨み、そしてそれに伴う邪術に対するおそれであるという。ニューギニア島のサゴ食民、クボ（Kubo）の間にも、「準平化へのオブセッション」〔須田 2002: 93〕とも呼ぶべき観念が共有されており、頻繁なるモノの分配や交換を促す社会的メカニズムが存在する。ここでも、このようなメカニズムを発動させるのは邪術へのおそれ、すなわち、邪術をかけられること、および、邪術をかけたと疑われることへのおそれだという。

マヌセラ村でも狩猟動物の肉をはじめとして、イモ類や野菜、そして塩や食用油などの購買品など、実にさまざまなモノが日常的にやりとりされている。²³⁾ マヌセラ村には「乞われれば

23) 日常的な「モノのやりとり」については、獵果分配慣行を扱った別稿でより詳しく論じる予定である。

与えなければならない」という社会倫理が存在する。それに背くと、他者から「ケチ (kali-hau) である」と評価されてしまう。彼らにとって「ケチ」と評価されることは大変な「恥 (muake)」である。また、「ケチ」とみなされる行為 (分け与えることを拒否すること) を繰り返すと、社会的に孤立するばかりか、他者から妬みを買う可能性もある。なるべくそのような評価を受けないよう注意を払いながらモノのやりとりを行っている。こうしたモノのやりとりによって確認され、強化される社会関係は、食糧が不足したり、屋根の葺き替えなど共同労働が必要になったりするときなど、他者の援助の確保を容易にする実効的な効用を持つ。

しかし、これだけでは頻繁に行われているモノの授受 (互酬的な分与) の説明としては不十分である。より踏み込んだ見方をすると、須田 [同上書: 114-119] の分析に示されるように、頻繁なるモノのやり取りには、「与え、受け取る」という行為を通じて、邪術をかけられたり、邪術をかけたと疑われたりする危険性を払拭し、常に友好的な関係を確認しようとする意味が込められているように思える。

マヌセラ村でも、人々の病気や死は、しばしば邪術 (toa kina) の結果であると解釈される。邪術は、あるモノに呪文を唱え、それを呪いたい相手に与えることで実行されることがある。そのため、緊張関係にある者のあいだでは、モノのやりとりが行われない。邪術をかけられたり、あるいは邪術をかけたと疑われたりするおそれがあるからである。逆に言うと、「モノを与え、受け取る」という行為は、当事者が相互に猜疑心を抱いていないことを表明する手段となりうる。「邪術をかけられるかもしれない」、あるいは「邪術をかけたと疑われるかもしれない」といった懸念を抱きつつ生活するのは、狭い集落のなかにあっては大きな苦痛を伴うに違いない。村人は頻繁なるモノのやりとりを通して、そのような猜疑心を払拭し、相互の友好関係を確認しているとみることができる。言い換えると、「与え、受け取る」という相互関係の中に身をおくことで安心を得ているとみることができるのである。また、マヌセラ村では、祖霊 (mutuaila) が何か「間違った行い」をした者に対して malahau と呼ばれるある種の制裁 (本人や本人の家族を病気にさせたり、狩猟や漁撈を失敗させたりする) を加えると信じられている。ここで言う「間違った行い」には、近親者に肉の分配を行わなかったり、夫婦や親子で口論をしたりすることに加えて、「陰で悪口を言った相手からモノをもらうこと」なども含まれる。したがって、このような民俗宗教も、「モノをもらう」という行為に、「与え手に対する友好の表明」といった意味を含ませているのである。

さて、これまで日常的なモノのやり取りを支えているメカニズムについて述べてきたが、サゴヤシ利用権の譲渡も、プレ・ハーベスト段階におけるサゴの分与とみなせば、日常的にやりとりされるモノのひとつと位置づけることができる。そうであるとすれば、サゴヤシの非排他的利用慣行を成り立たせている背景も、ここで述べてきたような、頻繁なるモノのやり取りを支えるメカニズムから理解することが可能であろう。

IV-5 サゴヤシを保有することの意義

非排他的に利用されているサゴヤシだが、その保有権が誰に帰属するかは、ないがしろにできない重大な関心事となっている。筆者が村に滞在中、そのことを示す、次のような出来事に遭遇した。

2003年12月、S・Asは集落の裏手にあったサゴヤシにseliと呼ばれる資源利用を一定期間禁止する禁制をかけた。S・Asは、このサゴヤシが北海岸沿岸部に暮らしている実兄によって植えられたものだと考えていたが、植栽者がずっと昔に村を離れてしまっており、サゴヤシ林に対する保有権の帰属があいまいになっていた。S・Asがここにseliをかけたのは、他の村人に対して自身の保有権を暗に示すためだったと考えられる（seliにはあいまいな保有関係を具体化するはたらきがある）。数日後、L・Liがこのサゴヤシ林を訪れ、何者かが設置したseliの標識（2本の棒を地面につき刺し、その上にココヤシなどの葉を渡したもの）を見つけた。L・Liは彼の父がそのサゴヤシを植栽したものだと考えていたため、seliを無視してそのサゴヤシの周りの下刈りを行った。後日、下刈りが行われたサゴヤシ林を見たS・Asは、そのサゴヤシが誰によって植えられたかを年配の者に聞いてまわったが、いろいろな意見があってはっきりしたことはわからなかった。結局、彼はL・Liの家に行って、L・Liのサゴヤシにseliをかけたことを詫言じた。それから約1カ月が経って、S・Asは原因不明の病にかかった。高熱で寝込んだ彼はそれから8日後に死亡した。45歳のS・Asの突然の死はさまざまに解釈された。死亡する少し前のクリスマスの日、S・AsはL・Liの家に挨拶に行き、ヤシ酒を振舞われていた（クリスマスには、村人たちはそれぞれの家々を訪問して挨拶を行うことになっている）。多くの村人は自分のサゴヤシに勝手にセリをかけたことに恨みを持ったL・Liが、ヤシ酒にまじないをかけてS・Asを殺したと考えており、しばらくそのことが噂となっていた。

この出来事から読み取れるのは、保有をめぐる認識の違いが、呪術の動機になるほどの強い怨恨を生み出しかねないと考えられていることである。つまり、保有権の帰属が尊重されるべき重大な事柄として意識されているわけである。

これまで述べてきたように、サゴヤシは「求めれば与えられる」、あるいは「求められれば与えなくてはならない」資源である。では、そのような資源を保有することには、保有者にとってどのような意義があるのだろうか。さしあたって次の点が指摘できるだろう。²⁴⁾ 第一に、先述のように、モノのやりとりによって形成・維持される社会関係は、食糧が不足したり、屋根の葺き替えなど共同労働が必要になったりするときなど、他者の援助の確保を容易にする実効的な効用を持つ。サゴヤシを保有している世帯は、保有していない世帯にその利用権を分与

24) これはドリアンやランサツなどの果樹にもあてはまる。それぞれの樹に特定の保有者が存在しているものの、保有者以外の者でもかなり自由に果実を採取している。しかし、樹の保有権の帰属はしっかりと認識され、尊重されている。

する事で、そのような相互扶助ネットワークを形成・維持し、自分が何か困ったときに他者からの援助を得られるようにすることが可能となる。つまり、社会関係という資源を獲得するためにサゴヤシが有用な資源となり得る。第二に、サゴヤシなどの有用樹木は将来商品価値を持つかもしれない資源であり、子孫に相続させなくてはならない財産であるとみなされている。マヌセラ村では稀に村長や小学校の教師などが、村人の採取した生サゴを現金で購入することがあるものの、通常村内でサゴが販売されることはほとんど無い。そのため、今のところサゴの商品としての価値は非常に低い。しかし、いずれ道路が開通して、ローカル市場へのアクセスがよくなれば、サゴが商品として売れるようになるのではないかと、という期待感が村人のなかにはある。

IV-6 管理者としての保有者

IV-3で述べたように、自身のサゴヤシがまだ生育途上にあると判断する場合、保有者は他者からサゴヤシを求められても、その要求を断る（実際には伐採をもう少ししばらく待つように言う）ことができる。「サゴヤシがまだ小さい」という理由で *pasua ipia* を断ることに、心理的抵抗を感じないと村人は言う。保有者はサゴヤシの成熟度合いを判断しながら、潜在的に非保有者に開かれた資源であるサゴヤシの利用をコントロールし、サゴヤシ林を良好に保つ努力をしているのである。

このような努力が、サゴヤシ林の保全に果たす役割は小さくないと思われる。事実、集落に隣接する *soma poto* と呼ばれるサゴヤシ林のように、特定の保有者が存在しないために荒れてしまったとみられるサゴヤシ林がある。このサゴヤシ林はずっと以前に、現在のマヌセラ村を構成している人々の祖先が共同で造成したものであり、現在は村人の共有となっている。以前は *raja* がこのサゴヤシ林の伐採をコントロールしていたが、政府から支給された村落開発基金を流用したとの疑惑がもたれていることなどを背景に *raja* の指導力が低下し、この *soma poto* におけるサゴヤシ利用のコントロールも全く行われなくなったという。その結果、生育途上の若い *u pepoto* のサゴヤシが無規制に伐採され続け、いまでは *ropu-ropu* に達する個体は見当たらなくなっている。若い個体は幹の上のほうにゆくと澱粉をほとんど含んでいないため、幹の上半分が髓を採取されぬまま放置されてしまったサゴヤシの残骸も見られる。*soma poto* の事例は、特定の保有者が存在しなければサゴヤシ林の利用に非効率が生じる可能性があることを示唆している。

保有者はサゴヤシが伐採適期を迎えているかどうかを判断してする以外にも、*seli* をかけることでサゴヤシ林の保全を図っている。村人の一部は、子供が小学校を卒業すると北海岸沿岸部にある中学校に子供を通わせるために、家族で数年間、村外に移住することがある。長期にわたって村を離れる場合、保有者はサゴヤシ林に *seli* をかけることがある（写真5）。*seli* とは、

実施した本人も含めて資源の利用を一定期間禁じるための禁制であり，これを破ると怪我をしたり病気になったりするなどの災厄に見舞われると信じられている。seli をかけることの意味について村人は，「無断で利用する者は，サゴヤシを伐採するだけで下刈りをきちんとしない」「upepoto から採った澱粉は粘り気があって旨いので，若い個体を好き放題に伐採してサゴヤシヤシ林が荒れる」といった理由を挙げている。



写真5 seli の標識

その他にも，保有者はサゴヤシの葉の採取を禁じることを目的に seli をかけることもある。先述のとおり，マヌセラ村では保有者に許可を取らなくてもサゴヤシの葉を採取することが許されている。サゴヤシを痛めないように1本のサゴヤシから1-2枚の葉をとるにとどめるという暗黙の了解事項が存在するものの，行き来の便利な場所にあるサゴヤシ林ではこのようなルールが無視されることもある。多量の葉の採取によってサゴヤシが生育不全を起こしそうな場合には，保有者によって seli がかけられることもある。この事例からも，保有者がサゴヤシ林を良好な状態に保とうと努力していることが窺える。

以上みてきたように，サゴヤシに対する実際のかかわり方から判断すると，ipia kua（サゴヤシ保有者）とは，持たざる者にサゴヤシ（利用権）を提供すると同時に，サゴヤシを良好な状態に保つ「管理者」としての役割を担っているのである。²⁵⁾

V まとめと今後の課題

セラム島高地におけるサゴヤシの非排他的利用慣行は，主食として最も高い評価を得ているサゴを，サゴヤシの保有規模に関わり無くすべての人が同程度に消費することを可能にしている。そして，この慣行を背後から支えているのは「持つ者が持たない者に分け与えることは当然である」といった社会倫理や，「与え，受け取る」という相互関係の中に身をおくことで安心を得ようとする人々の志向性であった。このように，サゴヤシは非保有者にアクセシブルであるものの，それがオープン・アクセスと異なるのは，保有者以外の者の利用は常に ipia kua

25) 土地保有者が管理者として振舞っている事例は，大塚 [1994: 66] の他にもソロモン諸島で調査をした宮内 [1998: 135-136] などに見られる。

(サゴヤシ保有者)の許可を経ており、場合によってはサゴヤシ利用のコントロールが行われることで、資源劣化の回避が試みられている点である。以上をふまえると、セラム島高地のサゴ食民にとって、*ipia kua* (サゴヤシ保有者)は、サゴヤシ (利用権) 分与とサゴヤシ保全の役割を担う「管理者」である。

しかしながら、近年、このようなサゴヤシ利用のあり方にも変化の兆しが現れている。村人によると、以前はサゴヤシが豊富で、伐採できずに開花・結実して枯死してしまう個体もたくさんあった。そのためサゴヤシ林では、落下した実(種)から生じた実生を、たくさん見かけることもできたという。しかし、1990年代半ばから伐採適期のサゴヤシが減少してきた。現在では、未成熟のサゴヤシが利用されていることも少なくない。先述の43のサゴ採取事例でも、うち20事例は伐採適期前の *u pepoto* の生育段階にある個体を伐採していた。*ropu-ropu* に達したサゴヤシが全体的に枯渇するなかで、近縁の親族・婚族からサゴヤシを求められ、本来ならばサゴヤシが大きく成長するまで許可を与えないのだが、やむを得ず *u pepoto* のサゴヤシを提供する者も出てきているという。

なぜ *ropu-ropu* の個体が枯渇してきたのかははっきりしたことはわからないが、村人たちは、サゴ採取の方法が粗雑になったことと、および「若い世代」が最適の伐採時期を考えずに伐採するようになったことなどをその理由として挙げている。²⁶⁾

資源管理に関する近年の人類学的研究では、資源利用における「排除と競合をめぐる人間の意識や行動、集団の判断が融通無碍に変わり行く動的な変化」を把握することが重要な課題のひとつとして位置づけられている [秋道 2004: 40]。セラム島高地民はサゴヤシの枯渇に対して今後どのように対応してゆくのか。これは、人類学的にも興味深いテーマになりうる。管理者としての保有者は、資源劣化を許しながらも平準化を志向するのか、それとも平準化を犠牲にして資源保全を優先するのか。あるいは平準化を図りつつも、焼畑作物への依存を高めつつサゴの消費水準を下げ、サゴヤシ資源の保全を図ろうとするのか。これらの問いに答えることはこの地域の資源利用制度の変容メカニズムを理解する上でなんらかの有益な知見をもたらすに違いない。それは、今後に残された課題である。

謝 辞

本研究で用いたデータの一部は、日本学術振興会・海外特別研究員(平成14年採用)としてインドネシ

26) 彼らによると、昔の人はサゴの髓を取り出すときに葉鞘を幹の横に受け皿として置き、飛び散った髓を少しでも無駄にすることがないように心がけていた。また、粉碎した髓をさらに山刀で細かく刻んで、できるだけ多くの澱粉が抽出できるようにした。現在はそのような事をする村人はほとんどいない。また、以前は最も澱粉含有量の多いとされる *ataleke* にある個体を選択的に利用していたが、未成熟のサゴヤシから採取した澱粉のほうが美味であることを理由に、若い世代の一部の人々が伐採適期に満たないサゴヤシを伐採するようになってきた、という。

ア科学院社会文化研究センター (PMB-LIPI) に派遣されていたあいだに収集したものである。マルク州での現地調査に際しては、Mr. I. P. G. Antariksaと、氏が所属するインドネシア科学院社会文化研究センターから様々な便宜を図っていただいた。また、論文執筆の過程では、井上真先生 (東京大学)、永田信先生 (東京大学)、及川洋征氏 (東京農工大学)、田中求氏 (筑波大学)、古澤拓郎氏 (東京大学) から有益なコメントや資料をいただいた。また、査読者の方からの御指摘は本論文の改善に多いに役に立った。これらの方々に記して感謝の意を表します。

参考文献

- 秋道智彌. 2004. 『コモンズの人類学——文化・歴史・生態』京都: 人文書院.
- BPS (Badan Pusat Statistik) Kabupaten Maluku Tengah. 2003. *Maluku Tengah Dalam Angka 2003*.
- Dwyer, P.D; and Minnegal, M. 1995. Ownership, Individual Effort and the Organization of Labor among Kubo Sago Producers of Papua New Guinea. *Anthropological Science* 103 (2): 91–104.
- . 1997. Sago Game: Cooperation and Change among Sago Producers of Papua New Guinea. *Evolution and Human Behavior* 18: 89–108.
- . 1999. The Transformation of Use-Rights: A Comparison of Two Papua New Guinean Societies. *Journal of Anthropological Research* 55: 361–383.
- Ellen, R.F. 1978. *Nuauulu Settlement and Ecology: An Approach to the Environmental Relations of an Eastern Indonesian Community*. Verhandelungen van het Koninklijk Instituut voor Taal-, Land- en Volkenkunde No.83. Hague: Martinus Nijhoff.
- . 1979a. Sago Subsistence and the Trade in Spices: A Provisional Model of Ecological Succession and Imbalance in Molluccan History. In *Social and Ecological Systems*, edited by P.C. Burnham and R.F. Ellen. London: Academic Press.
- . 1979b. Sago and the Moluccan Spice Trade. In *Social and Ecological Systems*, edited by Philip Buruham and Roy F. Ellen. Academic Press.
- . 2004. Processing Metroxylon Sagu Rottboell (Arecaceae) as a Technological Complex: A Case Study from South Central Seram, Indonesia. *Economic Botany* 58 (4): 601–625.
- 石毛直道. 1978. 「ハルマヘラ島, Galela 族の食生活」『国立民族学博物館研究報告』3(2).
- 掛谷 誠. 1983. 「『妬み』の生態人類学」『現在の人類学 生態人類学』大塚柳太郎 (編), 229–241 ページ所収. 東京: 至文堂.
- . 1994. 「焼畑農耕社会と平準化機構」『資源への文化適応』(地球に生きる 3) 大塚柳太郎 (編), 121–145 ページ所収. 東京: 雄山閣.
- 松井 健. 1989. 『セミ・ドメスティケーション』東京: 海鳴社.
- 三橋 淳; 佐藤仁彦. 1994. 「パプアニューギニアにおいて食用にされているサゴヤシのオサゾウムシに関する調査研究」『SAGO PALM』2(1): 13–20.
- 宮内泰介. 1998. 「重層的な環境利用と共同利用権——ソロモン諸島マライタ島の事例から」『環境社会学研究』4: 125–141.
- Nishimura, Y.; and Laufa, T. M. 2002. A Comparative Study on Technology Adaptation for Sago Starch Extraction in Pacific and Asian Local Regions. *Sago Palm* 10 (1): 7–15.
- 大塚柳太郎. 1994. 「多様な植物資源の利用戦略」『資源への文化適応』(地球に生きる 3) 大塚柳太郎 (編), 47–68 ページ所収. 東京: 雄山閣.
- . 1996. 「食物としてのサゴヤシ——サゴヤシ文化圏の人々」『遺伝』50(1): 60–64.
- . 2002. 「沿岸低湿地——サゴヤシ採集民ギデラの生態史」『ニューギニア——交錯する伝統と近代』大塚柳太郎 (編), 51–86 ページ所収. 京都: 京都大学学術出版会.
- Ohtsuka, R. 1983. *Oriomo Papuans: Ecology of Sago-Eaters in Lowland Papua*. Tokyo: The University of Tokyo Press. 197p.
- Ohtsuka, R.; and Suzuki, T., eds. 1990. *Population Ecology of Human Survival: Bioecological Studies of the Gidra in Papua New Guinea*. Tokyo: The University of Tokyo Press.
- 遅沢克也. 1990. 『南スラウェシのサゴヤシとサゴ生産——熱帯低地開発論』京都大学大学院農学研究科提出博士論文.

- . 1995. 「インドネシアのサゴ生産，熱帯生物資源利用の第一試案」『東南アジアの食品加工業』日本大学農獣医学部国際地域研究所（編），109-137ページ所収．東京：龍溪書舎．
- Rasyad, S.; and Wasito, K. 1986. The Potential of Sago Palm in Maluku (Indonesia). In *Sago-'85: Proceedings of the Third International Sago Symposium, Tokyo*, edited by Noboru Yamada and Keiji Kainuma pp. 1-6. Ibaraki: The Sago Palm Research Fund.
- Rijksen, H. D.; and Person, G. 1991. Food from Indonesia's Swamp Forest: Ideology or Rationality? *Landscape and Urban Planning* 20: 95-102.
- 佐々木高明. 1989. 『東・南アジア農耕論』東京：弘文堂．
- 下田博之; パワー, A. P. 1992. 「パプアニューギニア・東セビック州のサゴヤシ林の実態とその澱粉生産性に関する調査研究——第三報 サゴヤシの生育相 (1)」『熱帯農業』36(3): 242-250.
- Shimoda H.; and Power, A. P. 1986. Investigation into Development and Utilization of Sago Palm Forest in the East Sepik Region, Papua New Guinea. In *Sago-'85: Proceedings of the Third International Sago Symposium, Tokyo*, edited by Noboru Yamada and Keiji Kainuma pp. 94-104. Ibaraki: The Sago Palm Research Fund.
- 篠塚昭次. 1974. 『土地所有権と現代——歴史からの展望』東京：日本放送出版協会．
- 須田一弘. 1995. 「パプアニューギニア・クボ族のサゴ作りの生産性について」『SAGO PALM』3 (1): 1-7.
- . 2002. 「山麓部——平準化をもたらすクボの邪術と交換」『ニューギニア——交差する伝統と近代』．大塚柳太郎（編），87-126ページ所収．京都：京都大学学術出版会．
- Suda, K. 1990. Leveling Mechanisms in a Recently Relocated Kubor Village, Papua New Guinea: A Socio-Behavioral Analysis of Sago-Making. *Man and Culture in Oceania* 6: 99-112.
- . 1993. Socioeconomic Changes of Production and Consumption in Papua New Guinea Societies. *Man and Culture in Oceania* 9: 69-79.
- 高村奉樹. 1994. 「21世紀の作物サゴヤシ」『農化』68: 830-832.
- 高谷好一. 1985. 『東南アジアの自然と土地利用』．東京：勁草書房．
- 田中真砂子. 1994. 「所有権」『文化人類学辞典』．東京：弘文堂．
- Townsend, P. K. 1974. Sago Production in a New Guinea Economy. *Human Ecology* 2: 217-236.
- 豊田由貴夫. 1995. 「自分のサゴは自分で食べてはいけない——パプアニューギニア，セビック地域のサゴヤシの利用について」『SAGO PALM』3 (1): 23-25.
- . 2003. 「パプアニューギニア，セビック地域における多品種栽培の論理」『人類の生存を支えた根栽農耕——イモとヒト』吉田集而；堀田満；印東道子（編）．東京：平凡社．
- Valeri, V. 2000. *The Forest of Taboo: Morality, Hunting, and Identity among the Huaulu of the Moluccas*. Wisconsin: The University of Wisconsin Press.
- 山本由徳. 1996. 「サゴヤシとはどんな植物か（特集・サゴヤシとサゴヤシ文化圏）」『遺伝』50(1): 48-53.
- . 1998. 『サゴヤシ』熱帯作物要覧 No. 25. 東京：国際農林業協力協会．
- 吉田集而. 1993. 「三つのサゴデンプン採集民」『農耕の技術と文化』佐々木高明（編），139-160ページ所収．東京：集英社．